

チートたちの妖精國物語

にやはっふー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

集え、集え同胞たちよ

私は許せない、第6章、この異聞帯を許せられない

同じ志を持つ者よ集え、考えられるだけの理不尽を以て、この地を攻めよう

これは妖精たちの物語に、なんかしいといけないと思った男の我が儘な物語である

目次

妖精転生物語・チート・ル・フェ

第1話・転生者どもの凱旋 | 1

第2話・王国大波乱 | 9

第3話・天文台の魔術師の来日

20

第4話・ダイジエストな旅路 | 26

第5話・ベリル生存ルート | 36

第6話・身勝手な戦争 | 47

第7話・選択する勇氣 | 59

第8話・終わり良ければ全て良しで

しよ | 72

外伝シリーズ・夢物語

雑談話

第1と第2特異点攻略

これが始まりだ

第3と第4特異点攻略

第5と第6特異点途中

第6と第7特異点途中

第7特異点攻略

最終特異点攻略

これで最後の異聞帯攻略

オマケです

オマケ話

イマジナリ・オーマジオウ

81

91

101

113

122

132

142

153

163

173

180

72

妖精転生物語・チート・ル・フエ

第1話・転生者どもの凱旋

これは概念である、これは概念である。

許せない、悲しい、怒り、憎しみ、殺意、様々な感情が混じりあい、彼らをこの地に召喚した。

妖精國ブリテン。この怒り狂った世界で彼らは召喚される。

理不尽には理不尽を以てこれを正す為に、例えばそれが自己満足だとしても……………

「女王陛下ッ！女王陛下緊急の知らせが届きましたッ！」

「静まれ！女王陛下、モルガン陛下の御前なるぞ！」

「構わん女王騎士、火急の知らせか？いったいなにかあった？」

大慌ての妖精は、女王に頭を下げて膝を付き、上級妖精たちに囲まれる中で声を上げた。

「大地が、空飛ぶ大地、巨大な城が虚空より出現ッ！ 近くにあるソールズベリー、いえ

我々ブリテンへと宣戦布告を発令しています」

「空飛ぶ大地？厄災では無いようですが、内容は？」

『ブリテンの妖精は咎を背負う愚か者どもである。汝らは罪を償う為に生まれた者、汝らは一匹残らず死ぬ事が慈悲である。汝らは責任を背負うべき者、汝らは無邪気な悪意である』

殲滅する殲滅する。我らは理不尽、貴様たち妖精を憎む者、許さない者。

我らは一週間後、風の氏族オーロラの頸を取りに向く。罪を自覚せよ、罰を受け入れよ。汝ら妖精は救いは無い。我ら転生者同盟の意思の元、身勝手に、自己満足の礎となるが良い。

その言葉に妖精女王モルガンの夫であるベリルが転生者同盟？と首を傾げ、モルガンはやれやれと息を吐く。

どうせどこぞの妖精の一団だろう。どこから現れたか知らないが興味は無い。だからと言って、放置するわけにはいかない。

女王騎士300名と妖精騎士ガウエイン、妖精騎士ランスロットを派遣する事にした。それに伴い、牙の氏族が勇士を募り、これに備えた。



一週間後、それは蹂躪劇であった。

「リボルケイン!!」

光の剣を振るう、黒き戦士が女王騎士を一人、また一人討ち取る中、囲まれた。

その時、不思議な事が起きた。

「俺は太陽の子ツ!! 仮面ライダーBLACKRX!!」
ブラックアールエックス

女王騎士たちは爆発して、その中から颯爽と現れるRX。

「いっひひひ、一万円が一匹、一万円は二匹……こりや大量だツ!!」

青い制服を着こむ角刈りの男は目を円に替えて妖精たちを捕獲する。本来人間に妖精を捕まえる、この事自体不可能であるが、男に常識は通じない。

「なんだ毛虫だと? ふざけやがってツ!!」

毛虫に変えられた眉毛が分厚い男は最強の毛虫になって暴れまくり、元の姿になって妖精たちにプロレス技をかけたらし出す。

「お前らを捕まえた数だけお札様と交換してもらえるんだツ、大人しく縄に付け! 儂の名は両津勘吉ツ! 金の為にただいま参上!」

こうして牙の氏族たちは倒されていく中、後で去勢させられる。



「まさかここまで軍が押されるとは……」

妖精騎士ガウエインは牙の氏族、ウットワズが討ち取られた話を聞いて驚愕する。相手は顔に痣を持つ剣士らしい。

「ワーツハツハ、ここが敵の大將がいる陣地かッ!？」

一人の少女が空から降りて来て、陣が破壊される。ピンクのツインテールであり、少女のような彼女は、妖精騎士ガウエインを見る。

「あなたは、この軍団の関係者か?」

「いいや違うのだ。ワタシは面白い事があるから手を貸してくれと言われた魔王、破壊の暴君ミリム・ナーヴァなのだッ。お前、強そうなのだ。ワタシと勝負するのだ」

「良いでしょう、元よりあなたたちをこれ以上先に進める訳には行きません」

「? 彼奴ならもう町に着いたぞ?」

「……………なに?」



妖精騎士ランスロットは困惑していた。

なぜか攻撃が届かない、全ての攻撃が決まらず、自分はいつの間にか地にかたまり沈む。

「こんな、こと……………」

「貴様では私を倒す事はできない。なぜか分かるか？」

「ッ!!」

睨む事しかできないランスロット。白いロープを着こむ男性、日本にどこでも居そうな男は静かに問いかける。

「それは、私が王であり、君は偽りの意思で戦っているからだ」

「僕が偽りの意思だと?なにを言っている?」

「オーロラには慈悲をくれてやろう。輝きを失わず、最も輝く中で死なせてやる。これを慈悲と言わずなんというか?」

「ふざけるな!彼女の下には行かせないッ!」

二つのアロンダイトを取り出し、全ての魔力を乗せて彗星のように激突する。

だが宝具の一撃ですら、男には届かない。

【クロノス】

「ポーズ」

時計の音が鳴り響き、世界が静止する。

仮面が砕けて素顔を晒し、怯え、不安、焦り。様々な感情を煮込んだような顔のランスロットの頬をさすった。

「哀れな醜くも美しき竜の妖精よ。汝の罪は醜い肉塊である事に非ず、醜き愛を振り撒く妖精の醜い所を見ようとしないうところである」

唇にキスをして、彼は力を込めて回し蹴りを放つ。身体をくの字に曲げたランスロット。そのまま前へと歩き、ポーズは動きだす。

吹き飛ばすランスロットは地面にめり込み、起き上がると同時に口元に違和感を感じて、嫌悪感を向けながら男の背を睨む。

「お前」

「竜の妖精よ、貴様では我には勝てない。なぜならば」

「祝福の刻！最善、最高、最大、最強王。オーマジオウ！」

「我は最低最悪の魔王、オーマジオウだからだ」



その日、ソールズベリーは落とされた後、すぐに解放された。

妖精騎士ランスロットは捕虜として攫われ、ガウエインは残った兵士たちを連れて城へと帰還。

オーロラはソールズベリーの民の前で公開処刑された。それをした男の名は仮面ラ

イダーオーマジオウ。彼らの王であり、天空都市の王である。

ソールズベリーの民たちにオーロラは貴殿らの代わりにその命を差し出したと宣言して、妖精の民は泣いて喜んだ。

コーラルだけは不気味なものを見る目でオーマジオウを見ていた。彼女だけ、オーロラが彼に友人のように話しかけて、こんな事はやめて欲しいのとお願ひしたりしたところを見たからだ。

それでもオーマジオウは醜いの一語で塵すら残さず葬り去り、コーラルには風の氏族としてソールズベリーを纏めるように指示して去る。

ランスロットは発狂しながらオーマジオウに挑むも返り討ちに遭い、そのまま連れてかれた。

牙の氏族の勇士の半数はなぜか去勢させられ、全て解放された。ウットワズもまた、オーロラを殺されて怒り狂うが、何かを見せられて愕然としている。

「嘘だ……オーロラ、君は助かる為に……」

おそらく、牙の氏族や民を売り渡そうとしたオーロラの様子を見せられたのだろうが、その後は自問自答していた。

モルガンはそれらの報告を聞いてもそうかと、それに対してなにも言わない。転生者同盟、彼らの主張は妖精に罪有りと言う事だけ。

その通りだと彼女は思い、自分の城に攻め込んだらどうするか考えなかった。こうして転生者同盟は表舞台に出て来て、ブリテンの平穩を乱す。

彼らは許さない、理不尽には理不尽を以て彼らに罰を与える。その意思のまま、彼らはカルデアが来るまで活動する。

全ては一人の我が儘の為に………

第2話・王国大波乱

妖精國ブリテンに外からの侵略者、転生者同盟と言う存在が現れた。だがモルガンは妖精の一種か、または厄災の一つか程度にしか思わず、無視されていた。

そんな事もありながら、転生者同盟が本拠地になっている。ラピユタでは、今日も今日とて、妖精たちに拷問が下る。

「それでは彼らは幻部屋に入れてください」

とある地獄の鬼神様はそう言つて、妖精を仕分けしていた。幻部屋は幻を見せられ、妖精と人間の立場が逆転して弄ばれる幻の部屋。妖精たちの嗜虐性を反省させる為である。

これにもしも心から反省して二度としない、もうしないから許しを請えば解放される。両津たちもそれに同意して、幻部屋の主、転生者、うちはマダラたちに渡していた。「あなたたちは労働区に移動します。職人妖精たちは一から“作る”と言う意味を理解して、励んでください」

「ふざけるなツ!!」

土の氏族の妖精が剛力で殴りかかるが、はいはいと涼し気に捕まれて投げられ壁に埋

まる。

「あなたたちは捕虜になったんですよ？分かりますか？ 全く、長生きしているのに、子供のままなんて、どこぞのバカ神みたいな生き物ですね」

そう言いながら手を叩き、異世界観察を続ける為に、仕事を手伝う鬼神。鬼灯様は妖精たちを見極めて再配している。

逃げ出す者もいるが、両津や本田に追いかけて捕まり、酷い目に遭うか、両津たちの管理外から出て殺されるかのどちらかである。これでも両津たちは厳しいし、金の為に妖精を捕まえているが、優しいのだ。

「笑いが止まらないぜ。たかが頭遊園地野郎たちを引き渡して更生するだけでウン十万もらえるなんてな」

「銀ちゃん、アタシ酢昆布買ってくるネ」

「あの、僕だけ魔法使われた際、メガネが毛虫になったんですけど、戻してもらえませんか？」



転生者同盟は新たな場所に攻め込むと宣戦布告をして、彼らはマンチエスターに攻め

込んだ。

傷は癒えていないが、領主である妖精騎士ガウエインは兵を集め、モルガン陛下に懇願して出陣。そして彼女がたどり着いた時、それを見せられた。

「……………」

自分の領地のルールとして、「弱肉強食」を設けていた。強き者が弱き者を守ると言う掟を作り、維持していたと思っていた。

大敗したガウエインは一人だけ生かされて考える。

彼女の領民は誰一人、正確には人間を守っていなかった。地下に隠して、好き放題に殺していたのだ。

領主がしている。とても楽しい、とても楽しい。彼らがそう言っているところを見せられたのだ。

彼らは強力な幻術を掛けられ、ガウエインの軍や転生者同盟が来ている事に気づかず、いつものように隠れて楽しんでいた。

初め、ガウエインはなにをしているのか、なぜ自分がいるのに気づかないか分からなかった。そして攻め込む理不尽に心が碎ける。

「石当てか、農もやらせてもらおうか」

そう言ってオビトは巨大な隕石を口寄せして、妖精たちを潰した。

「何が楽しい？命を弄び、悲鳴を響かせ、いざ自分たちに振りかかると平然と助けを乞う。それがお前たちなのか？ 両津たちが必死に更生しようとする、妖精の実態か!?」
 例え千里を駆けて逃げ出す妖精がいても、この痣を持つ剣士から逃れる事はできずに捕まるか首を斬られる。

妖精に絶望した時、彼女は考えてしまう。自分も同じ、存在してはいけない生き物なんじゃないか？

そう思ったとき、戦いの中で初めて逃げ出し、自分の屋敷、愛する者の下に走り出した。



気が狂いだしていたからか、彼女は「腹が減って」いた。

だからなのだろうか、彼の無事を叫ぶと共に、別の事を考える。食べたい、その欲求が自分を駆け巡る。

(……………ああ、私も同じなのか……………)

涙を流し、愛する者に迫る腕を吹き飛ばす者がいた。

「パーゲ ゲ スト スト つ!!」

「やれやれ、幻術班が妖精の本性が出やすくなるって言ってたけど、これもか。災厄が目覚めた」

獣の厄災が目を覚ますが、彼は病弱な青年を守る結果を張り、屋敷を壊しながら罅を開き、青年を喰らおうとするそれを静かに見つめる。

「俺は両さんたちみたいに更生させようと思わない。だけどオーマジオウのように憎む事もしないし、同情もしない」

だが……

「止めてやるよ。お前たちが滅びるべき宿命さだめを持った生き物でも、好きな奴と一緒くらは俺が、このリムル・テンペストが許してやるよ」

だからこそ、

「獣の厄災よ。お前はいまここで生まれ変われ」

そうしてマンチエスターは滅ぼされて、妖精はガウエインを残してほぼ全滅。人間は全員、連れ去られるのであった。



モルガンは一人、水鏡と言う魔術を行使して、その様子を見る。

「……………何者ですかあれは」

ガウエインは厄災と化した。なのに、ガウエインを殺さずにそれを鎮圧した。モルガンはやつと驚き、一人残されたガウエインを回収する為に兵を出した。

「どこから狂いだしたのですか？」

一人、自問自答するモルガン。突如として狂いだした歯車に、彼女の問いに答える者はいない。

考えたところで変わらない。彼女はそう判断して、彼らを放置することにした。

「もしもキャメロットに攻め込むのなら、その時に対処すれば良い」

妖精が何万、何億殺されようと構わない。人間がどうなろうとどうでもいい。

彼女は妖精を救わないし、助けない。

結局それは変わらず、玉座にて静かに座するのであった。



【カワイソウカワイソウカワイソウ】

妖精が自殺する。何かに導かれるように、次々と自殺する。

「ひ、ヒイイイ」

一人可哀想な妖精は意識を持っていて、声に誘われるまま、死んでいく妖精を見つけ
てしまう。

【カワイソウカワイソウカワイソウカワイソウカワイソウカワイソウ】

蜘蛛のような手、それが人の姿に押し込んだような異形の化け物。それが赤い糸で妖
精たちを捕まえる。

「なっ、妖精^{ナイトコール}亡主!?! こんな街道にこんなでかいのが出るなんて聞いちやいねえぞッ」

恐怖に叫び声を上げながら、それはコツチニオイデ、コツチニオイデと言いながら、死
へと招いている。それに恐怖の悲鳴を上げた。

「うわああああああ、もう嫌だああああ」

—— チョッキン……………

「ああ?」

ずちやと肉塊が落ち、血が大地に吸われていく。

その様子を見ながら、オーマジオウは領きながら、その場を後にした。



「た、たすけ」

妖精が一匹首がねじ切れた。

「ウツキキ♪」

遊び相手がたくさんいて、お猿さんこと、猿王とかつて呼ばれていた猿は喜んだ。

あっち向いてホイ、腕相撲、膝カツクン。

楽しいな楽しいな♪遊び相手が山ほどいる。オーマジオウが言った通り、彼らはそう死ぬことはないし、遊ぼうと言えば喜々として遊んでくれる。

鉄の武器を取り出して突きあいたり、色々と遊ぶ。こつちが頑丈と知って、物凄く驚いて面白いし楽しい。

楽しい楽しい♪彼はそう思いながら妖精と遊びます。

こうして妖精が次々と死んでいるが、彼は気にせず遊び相手を探し続けました。



「うむ、昨今の妖精國は不景気ですね。やはり転生者同盟と言う組織の所為か？」

土の氏族の長たるスプリガンはそう言いながら、資金の運営をしている。本来妖精に料金などの概念は無いのだが、人間の真似事から、流通はしている。その流れを見ているスプリガンは、首を傾げていた。

『キングボンビー……ッ!』

ん?と顔を上げたスプリガンは外を見るが、何も無いし何も聞こえない。

「ん、いまなにか……いや、気のせいですね」

とある伯爵は決して自分に被害が出ないように、あらゆる結界を張っているのだが、それに気づかないノリツジの者たちは、お金が湯水のように消えて行く。



恥を雪ぐことも無く、モース撃退をしている妖精騎士ガウエイン。転生者同盟らしき妖精殺しや人攫いが起きているが、彼らに勝てる気がしない。

(……………)

妖精騎士ガウエインは、リムルによつて助けられた。何故か呪いが解かれ、愛する者に対して食欲を持つ事は無かった。

だがオーマジオウはだからと言つて許されるはずがないと、愛する者を連れて行く事をリムルに言う。一時リムル派とオーマジオウが戦いそうになったが、ガウエインは弱々しく頼むと言つてしまったのだ。

なのに……………

『別に構わない。彼女に食われても良い。いつ死ぬか分からない中で、彼女の夫になったのだから、満足さ』

食われかけた事や、全てを話しても彼は許して受け入れてくれた。

『愛しているよ バレーゲスト』

だからこそ怖くなった。もう自分が正気なのか、狂っているのか分からない、自信が無いから。

(私は彼から逃げ出した……私は、転生者同盟と戦えるだろうか……)

そう思いながら月日が経つと、ある日、転生者同盟から書状が送られてきた。

ガウエインはそうか、また町に襲撃するのかと遠い目で見ていた。覇気の無いガウエインを悪く言う者はいたし、心の中で思う者が多いが、モースと言う脅威から、誰も糾弾する事はしない。

妖精騎士トリスタンは心の中でせせら笑い、バカにする中、書状を見るモルガン陛下。

「ブツ!」

その時、30の大使と100の官司、妖精騎士トリスタンとガウエイン。6人の氏族の族長たち。そしてベリル・ガットはん?と驚いた。

噴き出したモルガンはすぐに正常な顔つきであり、誰も先ほどの事に触れられずにいる。

「へ、陛下？ 転生者同盟からなんと？」

「別に、些事の無い事だ」

そう言つて、何かをガウエインに渡すように女王騎士に指示する。女王騎士も困惑する中で行動する中で、ベリルだけがそれに気づいた。

(……？ 手紙と写真かありや？)

「えつと、なにになに？」

—— 私たち結婚しました。 b y : 妖精騎士ランスロット改めメリユジーヌ。

花嫁衣裳を着こむランスロットことメリユジーヌと、オーマジオウがいる。

オーマジオウの目から生氣は無く、魂が口から出ている中、お姫さまだっこしてメリユジーヌを腕でかかえ持つ様子に、ガウエインとトリスタン。その場にいる全ての者達が「は？」と思考が停止した。

第3話・天文台の魔術師の来日

転生者同盟は好き勝手に活動を開始した。当たり前だ、王であり、騒ぎの元凶たるオーマジオウは彼らに命令をしていない。各々好きなように活動させているから。

真実を教えられて、ある者は反省を促し、ある者は別の生き方を教えたりするが、基本は全員、ブリテンの妖精は死んで償わなければいけないと知っている。

様々な方法で妖精を苦しめる転生者同盟。そこに一人の騎士が現れた。名をパースヴァル、円卓の騎士にして、人類の限界を超えた若者。

「我々円卓軍は、転生者同盟の目的を知りに来た。どうか応答して欲しい」

そう言われたアイルーたちは中に案内して、パースヴァルとオーマジオウを会わせる。こういうのは言い出しつpegが担当するのだ。

「我々の目的はブリテンの滅亡である。少なくとも、それは行わなければいけない、償いである」

「なぜあなたはブリテンを、妖精たちを苦しめる？」

「それを知るにはまだ早い。だが、君には知る必要はある。ブリテンの守護者、モルガン打倒を掲げる君たちは、この國の、ブリテンの過去にあった真実を知らなければいけな

い
い

「モルガンがブリテンの守護者？」

「そう、彼女は妖精では無く、ブリテンの守護者だ。その意味をきちんと理解して欲しい」

そしてメリユジーヌと出会うパーシヴァル。彼女は少し疲れた顔をしているもの、少しだけ優しい笑顔であったことに、心の中で喜ぶパーシヴァル。

「そうか、君にはまだ真実を話していいののか」

「ランスロット、いやメリユジーヌ。あなたは知っていますか？」

「ああ、オーロラを殺された後、ここに攫われてね。自暴自棄に暴れていた私を何度も倒して、私が疲労から回復している時に、勝手に話したりした。それで色々、考える羽目になってね、うん」

パーシヴァルに自分のが知った事実を話すメリユジーヌ。オーロラが鏡の氏族は悪い妖精と口にして、自分の意思で滅ぼした事。オーロラはそれを嘆いていたと言う現実に絶望した事。

それらを何度も指摘されて、心の中でオーロラの悪意なき悪意に同意していた事。それに気づいていながら目を反らして、彼女を放置していた事や自分の罪。

「様々な事がいつぺんに来て、正直疲れちゃったんだ。オーロラの愛が無くなってもこ

の姿を保つことが出来て、私は何の為にとって」

それに優しくされていたら、全部こいつの所為だろうと言う事に気づき、ラピユタに
いる女性にどうすればいいか聞いたら、責任を取ってもらった方が良いと話になって結
婚したと話すメリユジーヌ。

「正直、流されたって思うけど、オーマジオウのあの顔が見られただけでざまあみろと
思ったね。このまま責任を取ってもらおうよ」

「そうですか……………」

パーシヴァルも色々なことを話します。あの日見た絶望の涙の事や、自分が円卓軍を
立ち上げた理由。それを聞き、メリユジーヌは静かに伝える。

「私からも話を聞いても、ブリテンの妖精は罪を償わなければいけないと思う。ここに
いる人たちは色々な思いで動いているけど、最終的な目的は変わらない」

「分かりました。我々もそれを視野に入れて動くとしましょう」

こうしてパーシヴァルは帰り、転生者同盟はそろそろ気を付けて動き出した。

来たるべき滅びの日、そしてそれを見届けるカルデアが来るまで、静かに活動するの
であります。



名無しの森にある、コーンウォールと言う村で目覚める者たちがいる。青年は自分を見守る少女、『マシユ』に話しかけ、きつとそうなんだろうと思う『ライサンダー』。

『そんな話の中で『トリストラム』はある本を見つける』

「おやこれは？」

そこには『マシユ』と『ライサンダー』は「恋人同士」であり、二人で駆け落ちしてここまで来た。『トリストラム』は『ライサンダー』の従者であり、村娘である『マシユ』を守ると書かれていて、それを見て『マシユ』は顔を真っ赤にしながら話す。

「あつはは、そうか、私とあなたって恋人同士なのかうんか恥ずかしいなもう」
そんな会話を遠くから見守る。



「ウオズよ」

「我が魔王」

膝を付く従者、ウオズはノートから筆を離して、魔王を見る。魔王こと、オーマジオウは遠くからそれを見て、静かに辺りを見張る。

「やはり奈落の虫は見ているな。決して見つかるな。まだカルデアと接触は早い、だからと言って無視しておくこともできない」

「ええ分かっております我が魔王……『ライサンダー』と『マシユ』は村にいる間、恋人同士と言う事もあり仲良く暮らして、村の様子を見守る』つと」

ノートにそう書いておき、『マシユ』はそれを機に、少しだけ意識し出すとも書くウオズ。それでいいとオーマジオウは言っており、それにサポートするように悪魔たちも現れる。

「クツフフ……リムル様の命令でありますからね。あなたには協力いたしましたようオーマジオウ様」

「よろしく頼む。さて……『春の記憶作戦』の始まりだ」

そう言つてその場から去るオーマジオウ。こういつてはなんだが、彼は最近忙しい。かつて猿王と呼ばれた個体や山の神たちが町や都市に行かないように誘導したり、メリュジーヌと夫婦生活したり、モルガンや、もつとやばい奴などの動きを監視したりしている。

マシユやダ・ヴィンチちゃんたちの誘導も忘れず、モース退治もしていた。

最近両さんたちもモース退治に精を出す為に、資金作りに異世界で金塊とか確保したりして、稼がなければいけないのだ。少し大変だが、メリュジーヌがいるから頑張れる。

勢いでやってしまったが、最終地点もリムルたちと話し合って決めており、後はカルデアの頑張りによつて、運命が変わるのだ。

だからこそ頑張ろうと躍起になる。

「最近、トネリコと妖精騎士ギヤラハットの恋愛劇も売れ出したし、もつと過激な奴を出しておこう」

救世主と妖精騎士の禁断の恋愛に、妖精たちはハマっている。ある日、女王陛下から全て処分するように言われ出すが、妖精は隠れながらドハマリするのであった。

第4話・ダイジェストな旅路

カルデアの接触到に伴い、彼ら転生者同盟は最終局面に差し掛かる。

様子見をしていると、オベロンはできる限り転生者同盟とカルデアを接触させないよう動いている。元々我ら転生者同盟はブリテン滅亡を掲げている為、円卓軍と交流がある時点でおかしいのだ。仕方あるまい。

オーロラがいない中、オーロラこそブリテンの王女であると掲げるゲリラ組織があり、まるで抑止力が働いているように、物語は進んでいる。

それを逆手に取り、できる限り転生者同盟は表舞台に立たず、先読みしながら『春の記憶作戦』を行う。

転スラからシユナを初めとした女性の方々を初め、銀魂からお妙さんたち銀座に生きる女性の視線から攻める。結果から言えば、アルトリア・キャスター・チヨロい。

そんな彼らがカルデアと接触するポイントの一つは、ノリツジの厄災退治だった。



『烈火拔刀!!』『流水拔刀!!』『黄雷拔刀!!』『激土重版!!』『翠風の巻!!』『錫音楽章!!』『狼煙開戦!!』『界時逆回!!』『月闇翻訳!!』『最光発光!!』『拔刀!!』

11人の剣士が突然現れ、逃げ惑う妖精や人間とモースの群れの間割り込む。

「行くぞみんな!!いまだけは、人も妖精も関係ない。これ以上、憎しみを蔓延させないために、俺たちはいまを戦う」

『オオオオ——ッ!!』

何も無い空間から武装した妖精たちや人間も現れて、避難誘導やモース退治をし始める。それにノリツジにいる住人や、それを見たカルデアの者たちは驚いた。

「転生者同盟!?彼奴ら、ブリテンを滅ぼすとか言ってるのに、助けに来たのか!」

妖精王オベロンはそう叫び、ダ・ヴィンチちゃんはいまはそれは良いと言って、最優先は災厄をどうにかすると言う事、マシユの事を優先する。

そしてノリツジの厄災を退けたカルデアと予言の子アルトリア・キャスター。だがモルガンの魔術によって、マシユとまた別れ別れになる藤丸立香。彼らはその後、災厄を退けた事でキャメロットに呼び出される中、転生者同盟は誰一人としてキャメロットに行かないらしい。

ただ言えるのは、カルデアの敵であり味方であるとメッセージは残されている。

「転生者同盟……」

藤丸立香はその名を口にして、自分たちの知識を呼び起こす。突然ブリテンに現れて妖精狩りなどを行い、殺し回る集団であると。

捕まった妖精は二度と帰ってこず、風の氏族族長であったオーロラを殺した組織であり、ソールズベリーでは憎まれていると言われている。

「敵であり味方か、彼らとは巡礼とは違うけど、真意を知る必要はあるね」

「ですね。私もそう思います」

アルトリア・キャスターもそう言い、オベロンは、ダ・ヴィンチちゃん提案に乗る気はさらさら無い。彼らと接触しても意味も理由も無いからだ。

そんな事もありながら、ウオズとリムルの配下の悪魔たちは藤丸たちの監視を続けている。



カルデアはその後、キャメロットでモルガンと会話するが芳しく行かず、王の氏族の族長と出会い、円卓軍と合流する。

円卓軍にはアイルーが居て、彼らが拠点となるロンディニウムで働いていた。「彼らも妖精かいパーシヴァル？」

「いえ、彼らは転生者同盟の者たちですね。彼らとは不可侵条約を結んでいますが、こういったことには協力してくれるんです」

「君たちが？ 転生者同盟とそんな条約を結んだのかい？」

「パーシヴァルはダ・ヴィンチの指摘に悩んだ顔をする。彼らには彼らしか知らない何かがあり、その為に妖精は滅ぼす、ブリテンを滅亡させると明言している。」

「藤丸たちは彼らがなんのために戦っているのか、ますます訳が分からなくなり、悩んだ顔をする。それでも、この國の物語は進んでいく。」

「ノリツジの鐘を鳴らしたり、オベロンの土地である森が妖精騎士ガウエインの手により、遺体も残さず焼かれたり。ソールズベリーの鐘が鳴らされる。」

「牙の氏族との戦闘が起きる中で勝利、その後は翅の氏族が収める町グロスターで三つ目の鐘を鳴らす。」

「そしてグロスターで偶然出会った妖精騎士ガウエイン改め、バーゲストとの謁見で驚く事実が発覚。」

「ウエールズの森の妖精たちだっ!？」

「どうして彼らはここにいるんだい?」

「私がモルガン陛下からの命令は、ウエールズの森を焼く事です。その地に住む妖精たちを殺すようには言われていなかったの、住人がいなくなつた我が領土に引き取つた

まです」

それにはアルトリア・キャスターも驚き、喜ぶ中で、カルデアには転生者同盟と話を
する事を進められた。

「彼らは何かを知っています。そしてなにより、モルガン陛下を倒せるのは、おそらく彼
らだけです。私から言えるのはこれだけです。私では彼らに会いに行くことはでき
ませんので、彼らから真意を聞いて着てほしいのです」

それに藤丸たちは了承して、湖水地方へと進む。

そこで妖精亡主になった妖精に頼まれて、ピースト幼体であるコヤンスカヤとの戦闘
……

「おっと、ここまでは読み解かなくても良いでしょう。あなたたちに我が魔王の一端を
お見せしましょう」

「クツフフ、リムル様と同格の魔王。お手並み拝見、といきましょうか?」

そう言って転生者ウオズは嬉しそうにノートに文字を書く。彼はずっとカルデアの
様子を『書いて』いる。

ここから先も、この國の出来事はウオズの書物……物語として、彼は『書き』続ける
のであった。



それは一方的であった。

「くっ、このッ！」

コヤンカスヤがモースの群れを操り襲わせるが、無数の銃器が現れ、一斉射撃で薙ぎ払う。

「……………覚悟は良いかコヤンスカヤ」

そこにいるのはカメンの言葉にライダーの文字を刻んだ仮面を付けた黒き王。仮面ライダーオーマジオウ。

空に浮かび、沼の中に沈む竜の死がいを守るように、無数の武器を取り出す。

「我が花嫁の遺体を暴く罪は重い。何本かその命を捧げよ」

「ツツ……………調子に乗るな人間がッ！」

【貴様は何も分かっていない】

闇闇が襲い掛かってくるが、巨大化するアックスカリバーで薙ぎ払い、闇の中から後ろを取るコヤンカスヤに対して振り向かず、コヤンカスヤに無数の剣が刺さる。

「ぐっ」

【クウガの刻!!】

巨大な魔力が噴き出し、コヤンカスヤはすぐに距離を取るが世界が止まった。

【マイティキック!!】

片足に封印エネルギーが込められ、放たれた一撃を受けてしまうコヤンカスヤ。ただそれだけで命の活動を封印され、動きを止めた時、再度ベルトを操る。

【アギトの刻!!】

「まっ」

【ライダーキック!!】

放たれた一撃で空高く飛んでいき、空にアギトの紋章とクウガの紋章が広がり、その中心が爆発する。

オーマジオウはそれを見ながら、カルデアを見た。

「なにあれなにあれッ!? なんかない得ない魔力量なんですけど!？」

「ああ、いまは魔力量は一般サーヴァント並みにしか感じないが、戦闘中はその比じゃない。ビースト幼体とも言うべきコヤンカスヤを一蹴できるほどの魔力量なんて」

「……………何者ですかあなたは」

藤丸が前に出て話しかける中、それに驚きながらもときめくアルトリア・キャスター。臨戦態勢を取る村正。驚いている糸紡ぎの妖精。

【……………先ほどの戦いを見て話しかけるか、カルデアのマスター】

静かに降り立つオーマジオウは、高らかに宣言する。

【我が名は仮面ライダーオーマジオウ。最低最悪の魔王にして、妖精を、この國を滅ぼす者。転生者同盟を立ち上げた創設者……全ての発端だ】

「転生者同盟!?ここでまさかその創設者が」

「あなたはここで何をしているんですか?」

【私の嫁の遺体をいじくる獣が居たのでね、殺害しに来たのだが……二度だけか、存外しぶといなビースト】

そしてしばらく沼を観察して、ふむと頷く。

【カルデアよ、いまより試練を与えよう】

「ツ!?沼から魔力反応、これは」

【いまから現れる呪いを鎮めよ。さすればマシユ・キリエライトがいる場所を教えてやろう】

「なんだって」

【戦えカルデア、お前たちはまだ舞台上に上がっていない。立ち上がる覚悟があるのなら、この程度の厄災は、軽く退けよ】

沼から出て来るアルビオンの竜に関するものと戦う中、それを静かに見ている者たちがいる。

「…………まさかビースト幼体があそこまで弱いとは」

「クツフフ、あれではさすがに判定はできませんね。あの程度の存在、ウチの者たちなら、誰にでも倒すことができますから」

「くっ」

ウオズは悔しそうに顔を歪め、ディアブロは優雅に微笑み、その様子を見守った。

カルデアは沼の異変を解決させたあと、マシユのいる場所を教えてもらい、そこで新たな協力者と出会うように助言される。

「あなたたちはなんなんですか？ 敵であり味方って」

「言った通り、我々は妖精を滅ぼす者であり、世界を救わないし、滅ぼさない。妖精を憎まないし、守らない。無論、カルデアの敵にはならないが、味方にもならないと言う意味だ」

「なぜあなたは妖精をそこまで」

「それをまだ知る時では無い。残りの鐘が最後になったとき、我ら転生者同盟の元に訪れるといい。君たちには真実を知る権利がある。故に全てを話そう。その時まで、さらばだ」

こうして物語は一気に進み出し、モルガンとの戦いへと針は進む。



「見つけたぞ、ボルボ上げろッ」

「了解ッ」

「さてと、妖精狩りや水遊びにも飽きて来たところなんだ。そろそろオーマから仕事もらうとしようぜ両さん」

「おうよ銀時ッ」

海の中から破片を回収する両さんたち。オーマジオウの下にそれを届けに出向く。
ダイジエストはまだ続く。

第5話・ベリル生存ルート

オークニーの鐘が鳴り響き、マシユと合流したカルデアは、大昔に活躍した救世主トネリコの真実を知る。

「…………トネリコって、あのトネリコだよな？」

「応、なぜか嬢ちゃんこと、妖精騎士ギヤラハットとの恋愛本がブリテン中にばらまかれてる奴だな」

「ああ…あれね。なかなか面白いよ、トネリコが本気だったらウーサーが可哀想だよ♪」
グリムとハベトロットはそう面白がりながら言い、マシユは少し頬を赤くしている。恥ずかしいからこの話はここまでにされた。

その後、妖精騎士トリスタンこと、バーヴァン・シーの罠にかかり、特殊な道具に閉じ込められた藤丸とアルトリア。彼らは転移して逃げたバーヴァン・シーを追いかけ、ニュー・ダーリントンへと向かう。

そこでは…………

「俺はお前たちをゆ”る”さ”ん”ッ!!」

「王の判決を言い渡す…………死だ」

人を殺し合わせ、中には同胞である妖精も争わせて殺し合う様を喜んでみていた妖精たちを虐殺する転生者同盟。

その隙に妖精伯爵ペペロン。彼の案内で藤丸たちを閉じ込めた道具の下に来るが、壊されていて、すでに脱出している二人はなぜか抱き合っていた。

「先輩？」

「えっと、これはその、俺が倒れかけたとき、支えてくれたんだっ」

「そ、そうですよっ、深い意味はありませんよマシユッ！」

「あらら、藤丸ちゃんったらもう……とはいえ早く脱出しないと危ない雰囲気よッ」

その言葉に脱出にかかるが、そこにクリプター、この異聞帯で暗躍する者。ベリルが現れ、モースの毒で苦しむ人間を出す。

だが彼らは蠢き、助けにすがってくるだけで、それ以上の事ができないほど呪いに犯されている。殺せばその呪いを受けるのだが、ペペロン伯爵がそれを見抜きそれを止める。どうすることもできないと思われた時、その時、不思議な事が起こった。

「なんだ？」

モースの呪いが消え、絶命する人間たちに驚く一同。

「くそッ、間に合わないのか」

「ゴースト落ち込むな。ヒミコ魂の使い過ぎで倒れるぞ。もうこのまま押し切るぞ」

「おいおい、あの呪いを即座に消すって、どんだけクレイジーな奴らなんだよお前ら」
追い詰められたベリル。だが邪法の魔術か、ウットワズの力をコピーしていて、その姿をさらす。だが転生者同盟は逃げられないように布陣を引く。

「カルデア、我々はベリルを倒す秘策を用意している。時間を稼ぎを手伝ってくれ」
『おいおい、いまの俺を殺せると本気で思っているのか?』

「ああ、心の底から同情するよ」

そして時間を稼いでいると、天井が割れて、誰かが降りて来る。

「来たぞ、オーマの旦那やみんなが用意した。対ベリル用のヒーローだ」

土煙の中から一人の男が現れる。

一糸纏わぬ姿、筋骨隆々のオカマが現れた。

「……………誰ですか?」

真剣な顔で尋ねる藤丸。マシユとアルトリアは真っ赤になり、ペペロン伯爵は同類と察する中、仮面ライダー鎧武は説明する。

「ぷりぷりプリズナー、異世界でS級ヒーローをしている。ただ男の人に手を出すから服役しながら活動している。今回はこの男、ベリルを更生させてほしいと頼んだら来て

くれたらしい」

「あなたねボーイ。綺麗な物や人を傷つけないと愛せない、悲しき男子は」

『な、なんだお前は!?!』

「あなたに本当の、真実の愛を教えてあげる。エンジェル・ハグツ!!」

『や、やめろおとおおとおおとおお——ツ!!』

その時、不思議な事が起こった。オーマジオウの力でモザイクが入る。そこからベリルのうめき声が響く。

——おい、やめろ、は、離せ、はな……………

きやん。

……………

……………

……………

無事に脱出したカルデア一向。マシユは顔を真っ赤に染め上げ、アルトリアは何が起きたか分からない顔。藤丸は少し吐き気を抑えて合掌しつつ、みんなと合流して、モルガン戦の為に、転生者同盟の下に出向く事にした。

「もう出番無くなっちゃたわっ♪あとでカルデアに捕まってカドツクと一緒に捕虜生活しないこと」

そう言うって、後の事を彼に任せて、カルデア一向は転生者同盟の下に出向く。



六つ目の鐘がどこにあるか分からない中、ロンディニウムにオーロラ崇拜者の連中が襲い掛かるが、アイルーたちやガレスが撃退した為に被害は無く、アルトリアは泣きそうな顔でガレスを抱きしめる。

そこから最後の鐘に付いて、また彼らの事を知る為に転生者同盟の下には藤丸、ダ・ヴィンチ、マシユ、アルトリア、パーシヴアルがやってくる。ラピユタに滞在するアイルーの案内で中に入る。

そこではこの妖精国では見なかった光景が広がっていた。

妖精は一から物を作り、楽しそうに人間と競い合っていたり、人間と一緒に畑を耕したり。

妖精国の妖精は、人間の文化を真似ているだけであり、模倣である。だがこの妖精たちは一から新しい文明を作り出していた。

そんな光景に驚きながら、とある妖精たちが祭壇らしい場所で祈りを捧げている。それに驚きながら近づいた。

「やあこんにちは、君たちはなにをそんなに祈ってるんだい？」

「あつ、ああ知らない奴か。まあ珍しいよな、こんなこと、前の生活なら信じられない。これは許されますように祈ってるんだよ」

妖精が話すには、自分たち、正確には始まりの六人の妖精は、悪い事をしたらしい。

なのにそれを他人の所為にして殺して、それを大地にしまった。それがこの世界の、ブリテンの始まりなのだと説明した。

「そんな話、聞いたことありませんね」

「ああそうだ、きつと俺たちが忘れたんだよ。モースも厄災も、殺された『神様』って奴の所為らしい。まあ自業自得さ」

「待ってくれ、神様だって？」

「使い慣れてないけど、凄い存在らしい。騙し討ちして殺して、そいつの大切な巫女もバラバラにして再利用したらしいんだ。詳しい話はオーマさんたちなら知ってるよ」

そう言つて彼らは衝撃を受けながら、オーマジオウがいる鐘突き堂へと向かう。



そこには後五つの鐘を収める場所であり、最後の一つ、鏡の氏族の鐘がある。

【修復にはかなり手こずった】

「修復したのかい!？」

ああ、と話しながら、「こうでもしないと死ななきやいけない子がいるからね」と言い、アルトリアは驚いていた。

いくつもの候補の破片を見つけては、時間を巻き戻す能力者や、因果律を操作できる能力の持ち主など、大勢の能力者の元に出向いて、完璧に復元した鐘を設置したのだ。

こうして最後の鐘をアルトリアが鳴らして、モルガンと戦う準備を整える。

【カルデアよ。モルガンを倒すのか?】

【それは……はい、それがアルトリアの使命だから】

【そうだ、だが使命はそれだけではない】

【なんだって!？」

ダ・ヴィンチちゃんに驚く中、オーマジオウが語るは、この國、ブリテン異聞帯の始まりである。

はじまりのろくにんの妖精が理想郷であるアヴァロンから出て来た時、この世界は海しか無く、彼らは途方に暮れた。

だがそこに獣の神……ケルトの祭神「ケルヌンノス」が妖精たちを改心させるべく、自らの巫女と共に現れ、彼らを叱りつけた。「こうなったのはお前たちが仕事をサボった

からだ」「反省しろ」「仕事をしろ」と…。

「サボったって、何の仕事を」

【聖剣の製作だよ】

「……………」

アルトリアは顔色を変えず、オーマジオウは続けた。この世界はある時に大きな戦いが起きた。それは藤丸たちがギリシヤ異聞帯で知った、地球にいた神々だけでなく他天体からの来訪者をも蹂躪したとされる巨人「セファール」によって大地などのリソースを奪われる戦いが起きた。

それを解決する為に、神々は理想郷の妖精に聖剣の製作を依頼したが、彼らはサボった。飛来したセファールを打ち倒す為の聖剣を作る役目を、彼らが放棄してしまった。今の世界がこうなったのはセファールによる文明の蹂躪が起点なのだが、問題はセファールにどう対処するかではなく、この世界には最初からセファールに対処できる手段がなかったことにある。聖剣とは星の外敵を滅する為になくはならないものなのだが、それを「今回くらい遊んでも大丈夫だろう」と聖剣造りを6翅の妖精たちが放り投げてしまった。

結果、戦いに負け、海を除き全てのリソースを奪われた後、地上の異変に気づき理想郷から出て来た六人。倒されなかったセファールによって地球の資源全てを押収され、

一部の水生生物しか生きていない”無の海”だけが残された。罪無き者のみ通れる理想郷の道は使えず、彼らは何もない海を漂う事になった。「たった一度のサボタージユがきっかけで生まれた」。それが、ブリテン異聞帯だったのである。

だが一柱の神が巫女を連れて、聖剣の製作をしなかった罪を説き、はじまりのろくにんを反省させようとした。しかし、ケルヌンノスは元来穏やかな性格であつたためか、この段階では、まだ彼らは罰を与えられていなかった。だが……

【妖精たちは耳を貸さず、感謝していたはずのケルヌンノスを手にかけてしたのは、「神が自分たちに仕事させなかったのが悪い」「いつまでたつても大地が戻らないのは、神のせいだ」と言い訳をし始め、神の宴を開き、神に毒入りの酒を飲ませて殺した】

そうして生まれたのがブリテンの大地。ブリテンの始まりは神の遺体から作られたのだ。

藤丸たちは驚きながらオーマジオウから説明を聞き、アルトリアは怖いほど、冷静に平然と聞いていた。

【そして妖精はケルヌンノスと共に現れた巫女に対しても死なない魔法をかけ、生きながらに彼女の身体をバラバラにして、自分たちの嗜好品を作るための人間の素材として使った。これがブリテンの始まり、妖精たちが忘れた初まりの罪だ】

「そ、そんな」ことが」

「凡人類史の君たちなら分かるはずだ。人間の生態系が他とは違う事を。この國の人間たちは、妖精國ブリテンに存在する人間は、巫女の細胞から造られた劣化コピーだということはこの世界の人類は誰も知らない。だから誰も気づかない。そして妖精は子供を産むという概念がないため、人間も生殖能力を持たず、彼らは自分たちの力で数を増やすこともできないんだ。なぜならブリテン異聞帯の人間は巫女のクローン……人類全員が兄弟のようなものだからな」

「……そうなのですか？」

パーシヴァルの言葉に、藤丸たちは答えられず、ダ・ヴィンチは尋ねた。

「それで、君たちは何者だい？そんなことを知っていて、妖精を滅ぼすと決めた君たちは」

「私たちはさまざまな平行世界や異世界より、このブリテンの真実を、残酷な事実を知り、妖精共に怒りを感じた、悲しみを感じた、憎しみを抱いた者達の集まりだ」

それを静かに聞く。オーマジオウは妖精を許さないとばかり言った。

「カルデアの者たちがどう思おうと知らない。我々は一度ブリテンを終わらす。その為にモルガンを倒して、全てを終わらせる」

「それが君たちの目的かい？」

「その通りだダ・ヴィンチちゃん。妖精たちの中には反省する者もいるだろうが、大厄

災、それを引き起こるのをあえて黙認する。もしも妖精に手を出さなくなるのは、崩落を止めてからだ」

「崩落？崩落だっつて?!君たちはそこまで知っているのかい?」

「カルデアよ、そなたたちの真の戦いは、モルガンを倒した後である。それをゆめゆめ忘れるな」

こうしてカルデアは一日、転生者同盟の下で休んでから、彼らはモルガンを倒す際に動くとのこと。

それを信じて、決戦の時まで、彼らは歩く事に決めた。

第6話・身勝手な戦争

戦場は二転三転する。

円卓軍と王の氏族たちが罪都キャメロットに攻め込み、進軍する中で、妖精騎士バグレストが反旗を翻し、モルガンの下にいるのは女王騎士のみ。

だがそこでついにモルガンは動く。いや、正確には自分と同列の分身を作り出し、全部に仕向けると言う偉業を成す。

作られた分身体は強く、数が多い。円卓軍も王の氏族もこれまでと思われた時、彼らは現れた。

欲望の王オーズ。彼はガタキリバコンボを使い、無数に別れた後、オーマジオウの力で増えたコアメダルを使い、全てのフォームへと変身する。

タジャドル、ラトラータ、ガタキリバ、シャウタ、サゴーズ、プトテイラ、スーパータトバ、タトバ、ブラカワニ、サラミウオ、シガゼシ、ムカチリ、セイシロギン、ピカソ、タマシーコンボ。

中にはシヨツカーメダルによる六枚変身も合わせたフォームのてんこ盛りであり、何体もモルガンを押す中で、ビルドたちが無数のボトルで変身する。彼らも異世界の仮面

ライダービルドであり、全員がなんのベストマッチで戦うか話し合ったのは言うまでもない。多くの仮面ライダーは別フォームを含めて転生者たちが変身して戦う。

かつて世界に君臨していた八王と呼ばれた者たちがいた。彼らはとある存在に敗北後、現役を引退して後任を探していた。その後任を連れて、モルガンへの戦いを見守る八王。モルガンが1000以上を使い、戦闘しているが戦闘すらなっていない。彼らにとつては遊び近い感覚であろう。

モンスターハンターの世界から絆を交わした古龍たちなどもあり、数多くの転生者ライダーたちが現れ、モルガンを押す。

玉座で相手をしているモルガンも、この数には少々うんざりしていた。

「この数は、問題なくても時間がかかる。まさかここまで敵兵がいたとは、長き統治で勘が鈍ったか……………」

その時、不思議な事が起こった。

「トオオオオオオオオオオオ——ッ!!」

一人の男がバイクにまたがり、テラスから玉座の間に躍り出る。配下の妖精たちはざわめく中、女王騎士が前に出るが、

「邪魔」

その一言で、マントを付けたハゲの男に一撃で薙ぎ払われた。

それらに一切興味は無いように、複数に展開する戦場を見ながら話しかけるモルガ
ン。

「何者ですかあなたたちは？」

「俺の名は南光太、転生者同盟の者だ」

「俺は趣味でヒーローをやっている、サイタマって言うんだ。よろしく」

分身が何人か現れ、モルガンはそれを聞き流しながら、戦場を見る。魔王ミリムや
リムル、悪魔たちやリムルの配下が町ごとモルガンを破壊しながら進軍する。

「……………まさか、このキャメロットがなんなのか知りながら、あえて破壊するとは……………
あなたたちは知っているのですね？」

「ああ」

その時、何かの能力か、風の氏族たちのように声を響かせる転生者同盟。

『真言である真言である。これより話すはこの世界の真の事実。妖精國ブリテンの罪科
であり、お前たち妖精が背負う罪である』

聖剣作成の放棄から獣の神ケルヌノスへの裏切り、その全てがブリテン中に広ま
り、多くの人間と妖精たちを驚愕させる。

『ブリテンの妖精は醜悪であり、忌むべき者。お前たちは死を以て償うべく生まれた。
だから戦いが生まれた、だからお前たちは殺され、滅ぼされるのだ』

「ふざけるな」「私には関係ない」「そんなの横暴だ」と文句を言いながら絶叫する妖精たち。親の罪は子の罪と言われているようなものだから、納得できないのも仕方ないだろう。

しかし、モルガンは同情せず、可哀想な者を見る眼差しで妖精たちを見る。彼らは先ほどまで戦争を楽しんでいた。今回だけではない、純粹に悦楽と欲望を満たすためだけに、人間を殺してきたこともある。蹂躪させる側になった途端、戦争などを反対し出す。それでもモルガンがすることは変わらない。

「あなたたち転生者同盟の目的は、ブリテンの崩壊ですか？」

「その通りだ、ブリテンの守護者よ」

ブリテンは一度滅び、償わなければいけない。故に……………

『我ら転生者同盟は、守護者トネリコ、否、理想郷の妖精ヴィヴィアンにして妖精國の女王モルガン・ル・フェを討伐し、大災厄を引き起こす』

「なんだって!？」

複数のモルガン相手に生き残る為に戦う藤丸たちは驚愕する。転生者同盟は大災厄を引き起こす気なのかと。

「あの人たちって、妖精を城に集めたり、更生させたりしてるんじゃないんですか？」

「ああ……確かに矛盾している。だけど彼らは一度も『妖精を許す』とは言っていない。

彼らはいまだに『ケルヌノスへ許しを請う』って言っていた」

「それって、つまり……まだ彼らの贖罪は終わっていない、転生者同盟は許していないと言うことですか!？」

我々は許さない、優しい神を裏切ったお前たちを、己の罪を彼の神の所為と言い、せせら笑う貴様たちを許さない。

故に大厄災を止めさせない。モルガンは大厄災を止める者、故に殺す。大厄災は引き起こり、汝らは苦しみながら死ぬべきである。

「そんなの矛盾です、矛盾していますっ!!彼らは妖精を守り、更生させているのに、大厄災を引き起こすのはおかしいです」

「マシユの言う通りだ、転生者同盟……」



仮面ライダーBLACKARXとサイタマの力の前に押される。サイタマは何も思わずに拳を振るい薙ぎ払い、時々悪態をつく上級妖精たちに苛立つ。

「負けるな」「責任を取れ」「俺たちを守れ」などと文句、罵詈雑言を言いながら、全ての責務をモルガン一人に押し付ける妖精たちに、ある男は怒りを募らせている。

「もういいだろうモルガン・ル・フェ。お前の役目は新たな妖精が引き継いだ。お前の旅路は終わりを告げた」

「いいえ、終わりません……終わらせません。どんなことがあるかと、ブリテンを存続させる。それが汎人類史の私から託された願いであり、私の使命です」

「くっ!!」

仮面ライダーBLACKRXがそう苦悶する中、モルガンは全ての戦闘を見る。

すでにミリム、リムルを初め、現れた悪魔やリムルの配下。昭和、平成、令和の仮面ライダーの中に、モルガンが100体いても薙ぎ払える存在がたくさんいすぎて、なんかもう可哀想になってきた……

「決して、決して終わらせない」

——「終わりだよ」。そんな言葉が周囲に響き渡り、玉座の壁と天井と上級妖精が消し飛んだ。

モルガンは即座に結界を玉座と共に張り巡らす。自分と玉座は見逃された事に気づき、顔を歪める。

「お前は」

「オーマジオウツ!!」

空に浮かぶオーマジオウ。その側に浮かぶものがある。

「バーヴァン・シー!？」

魂が腐敗する呪いの所為でボロボロであり、モルガンですらどうにもならなくなつた娘が浮かぶ。

【時間だRX、ここからは私が受け持つ】

「俺らごとく殺そうとしたよな、あんた……」

【あんたらは殺しても死なないだろう】

サイタマからクレームを受け入るながら、モルガンが射殺すように睨み、魔術を行使するが全てが目前で止まり、砕け散る。

「ノーモーションで魔術を無効化した……?」

【モルガンよ、この娘をどうする気だ】

「どうするとは?」

【この娘の魂はすでに腐っている。醜悪な妖精たちと同じだ】

「妖精などと一緒にしないでください、その子だけは違う。その子だけは」

モルガンはそう言い、リムルたちの下から分身体を消した。もはや予言の子なぞどうでもいい。

まずは目の前の者を殺す。そう思ったとき、世界が止まった。

「世界を、止めた?」

自分以外の時が止まり、困惑するモルガン。一時でも世界中の時間を止める事なんて自分ですらできない。

なのにこの男はいとも簡単に止めた。

【モルガンよ、選べ】

そう言つてオーマジオウはバーヴァン・シーの心臓を取り出した。それに顔を歪め、離せと叫ぶモルガン。だが握られた心臓を見せられ、動きを止めた。

【娘か国か、どちらか選べ】

【なにを、言っているのですか】

【簡単な二択だ。お前がブリテンを選ぶのなら、転生者同盟は手を引こう。だがバーヴァン・シーを選ぶのなら、私は大穴の厄災を目覚めさせて、ブリテンを蹂躪、破壊する】

【貴様……………】

モルガンが顔を歪めながら、揺れ動く。

バーヴァン・シーか、ブリテンか。その時にバーヴァン・シーは舌を出し、よだれを流しながら息も切れ切れでこちらを見る。

【お、かあ、さま……………】

【バーヴァン・シー】

「ごめ、ごめん、ごめんな、さい、ごめ、なさい……………」

涙を流しながら謝る様に、モルガンの心が揺れ動く。

【なぜ揺れ動く?】

「そ、れは……………」

【お前は何の為にブリテンを存続させた?なぜ聖剣を作らなかった?】

「それは……………」

ブリテンを支配する為、ブリテンを、この世界を存続させるためだ。

なのに言葉が出ない、声が出せない。

真実が分からないが相手は交渉している。そして答えは一つなのに、なぜ……………

(なんで私は答えを出せずにいる…………?)

そう思い揺れるモルガンに、首を振るオーマジオウ。

【やはり妖精は所詮妖精に過ぎないな】

そう言い、ぐしやりと、音が鳴り響く。



その音を聞いてから、世界から音が消えた。バーヴァン・シーは全身を一度振るわせ

て、動かなくなつた。

胸から赤い何かが流れ出し、黒い魔王はそれを大穴へと投げ捨て、身体は床へと投げ捨てて降り立つ。

「ああ、あツ、アアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

また奪うのか私から、また。そう考えている時、それは言う。

「何を嘆いている? これはお前が選択した結果だぞ、モルガン」

わた、しが?

確かにそうだ。私はブリテンを選ぶ、なにを置いてもブリテンを優先する。なら仕方ないのではないか。

何を、考えてる?

だけど、だが、それでも、でも、だって、私は、私は。

「ブリテンを選ぶお前に、彼女を救う必要がどこにある? 悪逆に生きれば、残忍に生きれば、妖精共に消費されることもないと、彼女の性質を反転させておいて、結局、彼女のことをずっと放置していたではないか、今のいままでずっと。自分にできることはない、とでも思つて」

「やめろ……」

「なんだ? いまさら母親面するのか? 自分を受け入れた妖精だけ特別扱いするのか?

「ならばお前と共に歩んだ妖精たちも同じ目に遭っても、貴様は無視できるのか？」
「やめろ」

【お前はブリテンに何を望む、こんなゴミ溜めになにを】
「やめてッ!?!」

バーヴァン・シーの頭部を踏み砕こうと、それは足を振り上げた。

私は動けない、動かなかった。

ああまた私から奪うのか、お前たちは、お前たちはまた私から。

だけど本当に？ 本当に奪われる事を止められなかったの？

私はバーヴァン・シーになにをしていた？自由にさせて、もう泣かなくて済むように育てていたのに、なにがいけなかったの？

誰か……………

私は良いです、もう良いんです。だからあの子を、娘を、私の大切な人を……………

たすけてください……………

その時、不思議な事が起こった。

「ヤ”メ”ロ”オオオオオッ!!」

第7話・選択する勇氣

戴冠式が行われる中、王の氏族、族長ノクナレアが女王になる。だがオーロラ崇拝者によって力が削がれてしまい、弱々しい少女の姿でカルデアに守られる。

同時にモースの集団が妖精國に現れ、町を襲っていると話聞き、カルデアはどうするか選ぶ事になった。

「ノクナレアはもう先導者として戦えない。ブリテン中にモースが現れたのは、彼らは把握しているはずだ」

「転生者同盟ですね」

「ああ、彼らなら何か知っているはずだ」

その時、ストームボーダーから連絡が入る。機械文明はこの妖精國では力を発揮できずにいたが、ブリテンが弱り始めたからか、力を取り戻し始めている。

連絡を受けて、彼の船に乗り込む事を決めた彼らは、レッドラ・ビットの力によって届けられた。

そこで驚くべき事実を知る。

「では諸君、まずはケルヌンノスを掌握しよう。その後、転生者同盟と協力、彼の神を打

倒する」

「待つてくれホームズ、それはどういふことだい？」

「すまない、君にだけでも連絡しておいてもよかつたが、それはやめておいた方が良いと判断した。私たちストーム・ボーダーはすでに、転生者同盟と協力関係を築いていた」

ダ・ヴィンチちゃんの質問に答えるホームズの言葉に驚く一同。彼が言うには彼らも一枚岩では無いらしい。

「元よりケルヌンノスの災いは発生させる予定ではあつたらしい。覚醒を促してブリテンを破壊する。それがミスターオーマの計画に含まれていた」

「じゃ、ケルヌンノスが目覚めたのは」

「ミスターオーマの仕業と言つて間違いない。彼は本気で妖精を、ブリテンを滅ぼす気だ」

「……………」

ゴルドルフは無言のまま話を聞き、その離反者からの言葉を伝える。

モルガンは聖劍製作をする必要があつたが、異聞帯であるこの世界を維持する為に聖劍を作らず放置していた。

「まずは我々は聖劍を作る必要性はあるが、まずはケルヌンノスを確認する。全て彼の言葉通りだと言ふ訳では無いからね、まずは大厄災を確認してから、聖劍製作へと移行

する」

「OK♪とりあえずりよーかい」

「分かりました」

こうしてケルヌンノスが現れる大穴へと向こう中、ゴルドルフだけは内心憤っていた。

「これで良いのか、あんなに悲しそうで苦しそうな顔をして決めておきながら、こんな中途半端で……彼奴は卑怯者だ、そして、哀れな被害者だ……」



ケルヌンノスと接触するカルデア一行。その呪いに驚愕して、撤退する事になる。まさかのコヤンカスヤの助けがあり、無事撤退する事に成功。その後、転生者同盟の言葉を信じると共に聞こえて来たマーリンに導きによって、彼らは聖剣製作へと移る。

「春の記憶、これは綺麗な花……」

「これがアルトリアの春の記憶……？」

そんな話をしながら聖剣を作る。聖剣を作る際、アルトリア・キャスターはその全てを交換する必要があったが、途中異星の使徒である千子村正が肩代わりする事で消滅を

免れる。

「じゃあなアルトリアッ、せめて藤丸と仲良くやるこつたなッ！」

「最後の最後でなに言ってるんだ村正アッ！」

そして少しの寄り道をした後、彼らは大穴から出て来るケルヌンノスト、それと戦う者達を見つけた。

「あれは」

「転生者同盟ッ?!」



呪われた腕の群れをかくぐり、それは高笑いしながら楽しんでいた。

「わーはっはっ、なかなかやるのだ神とやらッ! ルミナスとは違った意味で強いのだ」

最古の異世界の魔王が一人、ミリム・ナーヴァはそう高らかに宣言しながら攻撃する。それに揺れる体格に、残りも動く。

馬王ヘラクレス、奇しくも大英雄と同じ名前を持つ彼は、辺りの空気を吸い込み、弾丸のように放つ。

さらには八王後継者候補の者や元八王たちも、異次元、異空間を跳び回りながら、ケ

ルヌンノスを囲み、トドメを刺そうとしている。

ケルヌンノスは所々肉塊がえぐれていて、そこから無数の触手のような神経が再生する様を見せられてゴルドルフは漏らしていないか心配になりながら叫ぶ。

「これもう彼らだけでいいのではないかね!？」

ミリムやリムルなど、神の呪いを受けていながらも再生する様を見せていて、その配下も呪いに気を付けて戦っていた。

「先輩、私には分かりません。転生者同盟はこの事態を引き起こした、それが妖精を許す事ができないなら納得ができません。ですが彼らはなぜ、戦うのですか？何のために……」

「……………」

その答えが分からない藤丸は、ともかく彼らと協力して戦う事にする。RXが呪いをリボルケインで蒸発させながら飛び上がり、ライダーキックを放つ。

「やはり我々だけではここまでか」

「どうする、サイタマの拳でも浮かす事はできても肉塊をそり落とす事はできないぞ」

「ロンゴニミアドはもう無い以上、聖槍や聖剣で肉を断ち切る事はできない。どうする……………」

仮面ライダー達がそう言いながら、呪いの腕をかいくぐっていると、ストーム・ボー

ダーに乗り戦うカルデアを見ながら、アルトリアが肅清防除を張り、呪いを打ち消す。

その時、巨大な魔力を感じた。

「これは」



「聖槍展開」

ストーム・ボーダーよりも背後に浮かぶ空飛ぶ城、そこに砲撃を構える一人の魔術師

——モルガンがいた。

「私が玉座から降りた時点で、この結果は変わらなかつたでしょうね。いまだブリテンには未練はありますが、もう仕方の無い事です。ですが、だからと言って無視して良いはずはない」

放たれる十二の槍がケルヌノスを貫く中、それを見た時、リムルは思考加速を使い、シエルを通じて全員にこの戦いに勝つための戦術を到達した。

『全員一斉砲撃だ。一点集中で肉塊を突破するぞ！』

この指示を聞いた全ての者達は構えて放つ。

放たれた一撃は三分の一の呪われた肉をそり落とし、核と成る神核を見つける。

のだが……………

「あれは……………」

遠くからそれを見たマシユや藤丸は絶句して、周りの者達も顔を歪める。

「なんで覚醒させてるんだよ、オーマの奴……………」

「とはいえ、この事態もまさか、妖精たちの自業自得だったんですね、先生……………」

サイボーグのヒーロー「ジエノス」がサイタマにそう言い、それを見た。

それは……………

『私の所為じゃない、族長たちの所為だ』

『痛い痛い痛い痛いッ! どうして!? ニンゲン、いっぱいいるんだよ!? 少しくらい壊し

たっていいじゃない!!』

『俺は関係ない、俺に罪は無い。悪いのは殺された神様って奴がマヌケだからだろ!?! マ

ヌケの所為で苦しんで良いはずないじゃないか!?!』

『酷いわ酷いわッ!! 私はただ、汚いから捨てただけじゃない!! もうすぐ死んじゃうんだ

し、弱いもの捨てて何が悪いの!?!』

それは妖精たちの悲鳴でできていた。おそらくオーマジオウが集めた、妖精たちの悪意無い叫び声を集めたもの。罪を告発されてもなお、反省しない者たちの概念が、ケルヌノスを怒らせて怒り狂わせた。

マシユはそれを終わらせる為に、ブラックバレルを構え、神殺しを発動させる。撃ち抜かれる神核。それによって消え去る神の遺体を見て、ようやく安堵する。

「よかった、ハベトロットさんっ！」

ハベトロットに微笑むマシユ。その顔はすぐに凍り付く。

糸紡ぎの妖精ハベトロットは、空想の世界である異聞帯から、現実と化した妖精國に生きる妖精であった。その存在は不確かであり、少しの衝撃で消えてしまう存在。

それがまさに消えかけた時、不思議な事が起きた。

はおうけんクロスセイバー

『刃王剣十聖刃ツ!!』

どこからともなくやってきた創造を司る聖剣がハベトロットの元に届き、溶け込むように身体に入っていく。

「……あれ?どーして消えないんだ?」

「ああ、ハベトロットさんっ!!」

消滅が止まったハベトロットを抱きしめるマシユ。藤丸も驚きながら嬉しそうにして、顔を上げた。

「気持ち悪いな……これ」

その言葉に、ブリテンの崩落が始まった。



妖精王オベロン・ヴォーティガンは心底呆れていた。

「いやね、最初は別にいいやつて思ったよ？ あんなんいてもなにも変わらないって思ってた。だけどね、まさかモルガンやつついたりして、もう卑怯じゃん。俺の頑張りってなんなのって話」

奈落の虫を食われ、暗闇の中を落ちるストーム・ボーダー。藤丸とアルトリア・キャスターは警戒を解かず、オベロンを見る。

「彼奴ら何様って話だよ？ 無関係の癖に、好き勝手我が物顔で暴れ回ってさあ、どう思うよ藤丸」

「……………なにか理由があるはずだ」

「理由？ 理由って大した事無いんじゃない？ 頭悪そうな連中だけ？ そんなの」

【その通りだよ】

全員が驚き、声のした方を見ると、老人の後ろ姿を見せられる。

【私はただ、妖精たちが許せなかったただけだ。お前と同じだオベロン】

「……同じねえ、なら君も立派な悪人だね♪俺より酷いんじゃない?」

「だろうな、だが、同じだよオベロン。お前がブリテンを滅ぼしたい理由も、私の理由も」
「……君みたいな奴と同じ扱いはイヤなんだけど」

「ふざけるな、お前も当事者では……加害者でも被害者でも無いくせに」
その言葉にオベロンはニヤリと笑い、オーマは後ろを向けたまま話す。

「そもそもな話、妖精を裁く権利は被害者であるケルヌンノスにしかない。裏切られ、大切な巫女の尊厳を踏みにじられた。この物語はケルヌンノスにしか怒る権利を持っていない」

「気持ち悪いから、悲しいから、許せないから。これらの理由があろうとも、私たちが裁くのは間違っている。それは妖精となんら変わらない」

「だが、私は選んだ。例え今更でもな」

「……………お前」

その素顔に藤丸は驚いた。アルトリアも、オベロンも。

その素顔に面影があつた。ある男の、とある人類最後のマスターの。

「私は最低最悪の魔王、全てを救う力があつたのに、途中からしか顔を出さない卑怯者にして、その力で物語を歪ませて、世界を終わらした男」

「後悔しか無い、俺は救いたかつただけなのに、彼らを救う事は間違っていると世界に言われて滅んだ。使えばそうなると思つていながら、途中で耐えられなくなり力を使つて、全てを裏切つた」

「だからまた同じ事をしよう。今度は世界を終わらせず、途中から、子供の我が儘のようになつていても、今度こそ誰かを救う為に挑む」

「……気持ち悪いな君、諦めたらいいじゃん」

「生憎ともう吹っ切れたよ。赤の他人の物語でも、途中からでも、この物語、この時だけでも全てを捻じ曲げる。いい加減にしようオベロン、私と君は同じだよ」

「妖精皆殺しにしておいて良く言うよ」

「ああしたよ、だから」

空間にヒビが入り、あらゆる場所が映し出される。

『もう大丈夫だ、モースなぞ俺達が倒してやる』

『こつちにけが人を集めろ、ここなら空に浮かんでるから安全だ』

『翅の氏族の町もこれで全員だ。ブリテン中の妖精は収納したはずだ』

「……なにこれ？」

「妖精たちにラピユタをあげたのき、思ったんだが私に城は不要だからね」

「じゃなくって、彼奴らブリテン捨てて城に逃げ込んでツ。なに、あんなに大地を作っておきながら、平然と捨てて恥ずかしくないのかツ!？」

「平然では無いよ、更生した彼らには初めから伝えていた」

「なっ」

「初めからだよオベロン・ヴォーティガン。私は初めから、ブリテンの大地を壊して、それで生き残った妖精を空飛ぶ城に住まわせて、反省を促す。ケルヌンノスが用意できなかった許すシステムを代わりに用意する事……それが私の計画だ」

ケルヌンノスの怒りより助かった妖精を全てラピユタで保護して、その後は世界に漂う城として放置する。

それが初めから決めていた事であり、転生者同盟の最終目覚。

「いまを持つて私はケルヌンノスの代わりに許そう。彼らは大厄災を乗り越え、反省し、新たな世界に生きる権利をやるう」

「何様だお前ツ、そんな事」

「許すツ!!なぜならば私は、最低最悪の魔王!」

【祝福の刻】

【仮面ライダーオーマジオウ。物語を破壊する、最低最悪の魔王なり!! さあ、今度は舞台から共に去ろうか、妖精王オベロン・ヴォーテイガンツ!!】

こうして最後の戦いが始まるのであった。

第8話・終わり良ければ全て良しでしょ

奈落の虫との戦いに目を覚ましたカルデアは、オーマジオウと協力して戦う。だがもうすでに奈落の虫の敗北は決まっていた。

「なんなんだ……」

外から迫る、スーパードロイドたちが空間を破壊して奈落の虫にダメージを与える。

「なんなんだよ……!!」

中から無限の力を持つ、様々な存在が中を壊して出口を作る。

無限を司る龍神や勇者の盾を持つ者を初めとした、人々が知り得る限りの超常の存在が集まった。

「なんなんだよ、お前たちはッ!!」

【通りすがりのお節介焼きだ、覚えておけ】

奈落の虫はすでに消滅領域になった時、終焉の刻は告げられた。

多くの転生者、それに協力する者達は飛び上がる。銀さんも両さんもツラも飛び上がる。

【逢魔時王必殺撃ッ!!】

『オールチートターイムブレイク!!』

突き刺さる一撃にオベロン・ヴォーティガンはついに倒され、カルデアは崩落から脱出する。



「いま思うに、スーパーロボット時空に行ったのは間違えて無かったのかな？」

「そんな事はありません、我が魔王」

側に仕えるウオズにブリテンに飛ぶスーパーロボット達に疑問に思うオーマジオウ。

彼らの様子に藤丸達、藤丸は複雑そうにこちらを見る。

「もし俺に力が無かったから、必死になれば、ジャンヌ達と友達には成れてたのかな」

「オーマさん……」

「私と君は違う存在だ、私が歩んだ世界と君の世界は違うものだろう。もしかすればこの力があればと思う時があるかもしれないが、私は失敗した。君はそのまま、仲間を信じて先に進め」

「……はい」

「オーマジオウさんっ!!」

『先輩っ!!』

『皆さんがなにを言おうが、事実、先輩には世界を救う力があつて、それを使わなくても』

『私は先輩を信じます』

『だからあなたも』

『私達を信じてください』

幻聴が久々に聞こえた。ここ最近仲間集めや資金集めで聞こえなかった、かつて存在した声が。

オーマジオウは静かに振り返り、満面の笑みのマシユ・キリエライトを見る。

「あの、ハベトロツトさんを助けていただき、ありがとうございます」

「……………帰るぞ。ウオズ」

「分かりました。我が魔王」

そう言つて空に浮かぶオーマジオウとウオズ。そしてカルデアに向かつて宣言する。

【カルデアよ。今回はたまたま、介入する者がいた為、このような結果になったがたまたまだ。次も助けが来たり、物語を破壊しようとする者が現れる可能性は無いかもしれない。それは誰にも分からないが、私はこれ以上、この世界には介入しない】

目の前でマシユが死んだこの異聞帯以外、介入する勇氣は無い。ホームズ達にはすでに伝えた言葉を口にして、オーマジオウ達、転生者同盟はこうして去って行く。

複雑な心境ではあるが、それでもまだマシユな結果になったことを苦笑しながら、藤丸とマシユ、アルトリアは彼らに手を振った。

お礼は言わず、だけど非難もせず。彼らの退去を苦笑しながら見送るのである。



空飛ぶ妖精郷ラピユタは今日も次元に浮かび彷徨う。

「女王陛下、本日の議題です」

「ありがとうございます」

妖精女王コーラルはそう言つて書類整理に精を出す。なし崩しにこの席に座つたが、いまでは様になり、日々反省した者とそうでない者の扱いに頭を痛める。

この城の動力は城に住む妖精達全員の力で浮かんでいる。その為に人間ほどに力が弱まった妖精がいるのだが、おバカな妖精はおバカのまま。

牙の氏族、族長であるバーゲストによる肅清や調教など、いまだ後を絶たないが、それをする機材などある為に、困る事は無いだろう。

「女王陛下、ムリアン財務大臣が今月の財政について意見を求めています」

「ふう、分かりました騎士バーゲスト。鏡の氏族、族長である騎士ガレスと、人間騎士パーシヴァルと共に会議の準備を」

「はっ」

こうして妖精郷として空に浮かび、今日も今日とて賑やかであった。



「マイク、このカフェオレってのを一杯」

「おうとも。って言っても、ウチは宿屋なんだけどなあ」

「そう言いながら食堂に集まる妖精や人間の為に料理を振る舞う。曰くマイクの所は絶品との事。」

「みんな前のように力が使えないから、自分で考えて工夫すればいいのに。俺は頑張るぞ、またウチに天使が舞い降りる事を祈ってな」

笑顔で今日もマイクは働いた。その内、弟子になる妖精や人間を雇うよ。

今日も元気に、彼らは働いた。



とある世界でRX、転生者南光太はため息をつく。

「これではオーマの事は言えないな」

「どうしましたか光太」

「いや、何でもないよモルガン」

「そうですか」

微笑むモルガンはエプロンを着こみ、この世界の衣類を着て、家事をしていた。光太の家に転がり込んだ妖精達の面倒を見ながら、時計を見る光太。

「そろそろスピネルが帰ってくる頃か」

「あの子だけそのまま名乗れないのは悔しいのですが、学校は楽しそうで何よりです」

モルガンはそう言つて、ソファに座る光太の隣に座り寄り添う。光太は苦笑してモルガンと共に時間を過ごす。

「またいちゃいちゃしてる……………」

「スピネルお帰りなさい」

「お帰りスピネル」

「ただいま帰りました。お父ちゃま、お母ちゃま」

ランドセルをちやんと置き、人間社会の勉強をするスピネル。全て思い出した、モルガンの愛を、トネリコへの感謝を。

だから大人しく愛されようと頑張る娘に、二人は微笑んだ。



いつの間にか賑やかになった場所で、オーマジオウはため息をつき、今後の事を考える。

自分のしたい事はしてしまっただが、それが終わりでは無い。報酬として異次元、異空間への行き来のデータの提供や、単純なお金のやり取り。自分の力を借りたいと言う世界への支援など、やる事はたくさんだ。

リムル達から色々教えてもらいながら、発狂しつつこなすオーマジオウ。今日も帰りが遅くなる。

「メリュジーヌに会いたい」

「なんなら妾を作られては我が魔王?」

「メリュジーヌからお前の言葉は半分受け流せって言われてるから」

そうした仕事をしている時、部屋に入ってくるふさふさした者がいる。

「ケルヌンノス、どうした？」

手振りで何が起きたか説明するケルヌンノス。妖精郷からのお祈りがちゃんと届いているから、何かしたいと言う。

「それはいいだろう、まだ許すなよケルヌンノス」

そんな話をしながら、そろそろメリユジーヌが来て甘やかしてくれる時間だとホツとするおじいちゃん。お茶を飲み、一息つくのであった。



メリユジーヌの二人つきりになるオーマジオウ。彼女の膝に顔を置き、優しく微笑む彼女の側で話をする。

「アルトリア・キャスターはあの後はどうしたの？」

「ハベトロットと共にカルデアらしいよ。召喚で正規世界のモルガンや妖精騎士を呼んだらしい」

「私もいるの？」

「だろうな」

「言っておくけど、どっちがマシかなんてわからないからね」

「……………」

そう言われても考える。この結果は幸せなのか、正しいのか分からない。けどどしたのだから責任を取らなければいけない。

そう思っているとキスをしてくるメリユジーヌ。

「私は今は幸せだよオーマジオウ。だからもういいの、分かった？」

「……………ああ、分かったよメリユジーヌ」

そう話しながらひと時を楽しむ。今後彼らは動く事があるか分からないが、無理矢理ハッピーエンドなのは確実だ。

彼らの存在を許すか許さないか、それは誰にも決められないだろう。

「子供はサッカーチーム作りたいな」

「待って誰からそんな事を聞いたの」

「銀時」

「……………ああ今度は世界を滅ぼそうかな？」

「ダメ、私を愛しなさい、オーマジオウ」

そんな日々を過ごすのであった。

外伝シリーズ・夢物語

雑談話

英霊の座、ここに登録されている英霊達が一度集まり、話し合いが始まる。議題はオーマジオウなる者に付いてである。

すでに何人かの顔色は悪く、泣きそうな顔になっていた。

「私には人の心が分からない……」

「ごめんなさい……こんな、こんな事になるなんて思つて無くつて……」

ジャンヌオルタは良い気味よと懺悔するジャンヌを見て微笑む。円卓達は気まずい顔であり、アルトリアはオルタ化しそうであった。

「……まあ、君達は彼が隠し事をしている事を咎めただけだ。私のように全力を出していないと叫弾はしないだろう」

エミヤがそう言うが、だからと言って取り返しのつかない事には変わりない。啓示で聖人は藤丸立香に特殊な力がある事を察していて、それを一切使わない彼に不信任を抱く。

ギルガメツシュはその辺は全く気にしていなかった。賢王は一切藤丸を信用しない

と言って、特異点修復の壁には成っていたが……

特殊な力を持つ藤丸の人理修復の旅は悲惨の一言である。力を除けば普通の青年が、唐突に世界を救う重任はもちろんの事、どれだけ努力しても認めない英霊が多いと言う事態。良く人理修復ができたものだ。

山の翁などの有力者は力を使えばどうなるか分かっていた為に何も言わなかったが、適度に力を持つ者は察してしまい、関係をこじらせたのは言うまでもない。

もしも彼に悪い所があるとすれば「藤丸立香」を指した所だろう。

それ以外にも至らない所はあるが、彼は力があるだけの一般人である。手を抜いている訳では無いが、そう映る者もいた。

「いや、あんだだけツエエのに、素人の動きしてたからなあ」

クーフリーンはそう言うが、実際彼は強くても素人であった。この矛盾に英霊達は困惑したのは言うまでもない。

「……………私はどうすればいいのだろうか」

「王よ……………」

後悔するアルトリア、結局彼は最後に力を使った。第6異聞帯でマッシュが死に、怒りと嘆きのままブリテンをケルヌノスと奈落の虫ごと滅ぼし、そのままビースト達を滅ぼした。

そしてその事実を無かった事にするために、抑止力は彼の世界は無かった事にしてしまった。これはあまりにヒドイ話だ。

「……………ウオズと言う転生者に、感謝しなければいけないのだろうか我々は」

自分の為だからとは言え、絶望して一億年閉じこもっていた彼をまた動かしたのだから、良い事だろう。そう言えば、フオウは普通の青年なのに、良く懐いていた。

最後には比較のビーストになり、戦うことになったが、オーマジオウには勝てなかったビーストⅣ。

こう話し合う彼らだが、結局話し合いは、今度こそ彼を信じて戦う事だろうとなり、召喚される事を待つのだが……………

「我が魔王はサーヴァント召喚は一切しないよ、当たり前だよ？ 我が魔王の立場で考えてみたまえ。自分を信用しない者達を、なぜ呼ばなければいけない？」

そうウオズは締めくり、オーマジオウの住処となった、何も無い星の召喚装置を一切合切取り外すのであった。



シユミレーション内の戦闘で、ハベトロットは叫ぶ。

「変身ッ！」

『聖刃、抜刀!!』

『ドラ！ドラゴン！ライオン！戦記！アーアランジーナ!』

『絆が導く勝利の約束！合併出版！フィーチャリングハベトロット!』

『三冊特装版!』

青いライオンに乗り、戦場を駆けるハベトロット。聖なる剣を巧みに操り、エネミーを消し去る。

それを無言で見つめるモルガン（妖精國正規）。

『刃王必殺リード!』

「にやあにやあ、にやにやにやあ、にやにやにやにやあ!」

『既読十聖剣!』

「魔法系、抜糸！バレル解放！砲身、根性で固定!」

十本の聖剣が込められた弾丸が辺り一面にいたエネミーを薙ぎ払う。ハベトロットのその力に、周りが呆然になり、ハベトロットはいえーいとピースサインする。

「どういうことですかトロット?」

「にやあ?」

モルガンが首根っこを掴み、フィーチャリングハベトロットは首を傾げた。



「なんだよもう、別に強くなってるんだからいいじゃんか」

「よくありません、あんな変な物をこれ以上持っているのは反対です」

「うーん、だけど、この『刃王剣十聖刃』はおうけんくろせいぱいをハベトロットから取り出すのはおすすめしな
いな」

ダ・ヴィンチちゃんもルガンに言われるがまま、ハベトロットを調べたところ、そう結論付けた。本来の歴史、妖精騎士トトロットであり、ハベトロットである彼女は本来、空想の中で生きる妖精であった。

だが空想から現実に入り替える際、必要な記録を持って、妖精國ブリテンに存在する為に、色々していた為、かなり不確かな存在になっていた。それを、過去と未来、現実の記憶を持つマシユが認知してしまい、消えるしか無くなったハベトロット。

「この剣は言わば楔だよ。ハベトロットと言う存在を、空想でも現実でも存在させる杭のようなもの。聖剣事態、エクスカリバー並みの神秘を内包してるし、取り外すには使
い手を見つけれしかない」

「くっ」

「まあ僕は面白いし、みんなの役に立てるから良いんだけどね♪」

清姫にストーキングされた時も、いくつもある聖剣を使い分けて撃退できたしと報告するハベトロット。モルガンは諦めて去る。

「そう言えば、ダ・ヴィンチちゃん、この前の呼符1000枚は大丈夫？」

「ああ、それは大丈夫。リソース問題は解決されていないけど、あれは一回だけの出血大サービスマス♪気にしないでくれ」

「まあ、おかげでモルガンやオベロン。バーヴァン・シーやバーゲスト達を召喚できたけど……」

藤丸はそう言い、ハベトロットがクリムゾンやハイブリットのフォームを使い分ける為に、またシミュレーションを起動させてほしいと言うので戻る。

ダ・ヴィンチはてへぺろしながら、部屋から出て行った藤丸を見て、苦笑しながらめ息をつく。

「君は誰であっても優しいね。お節介なところはどこも一緒なんだろう」

そう言い、出入り口である穴を隠しながら、研究を続ける。

こうして平和な一日を過ごしたのであった。



目が覚める。ここ最近、眠りは良い方だ。人理修復時のようなプレッシャーを感じず、目を覚ますオーマジオウ。側でくるまつているメリユジーヌを見ながら、今回は乗り越えられたと安堵する。

「メリユジーヌ、朝だよ」

「ん~~~~」

目を開けずにオーマジオウを抱きしめる竜の妖精。それに何度も起きるように言うが、二度寝に誘おうとするメリユジーヌ。

アイルーが起きて、朝ごはんの準備をしているのだろう。そろそろ起きないと勿体ないと言い、起きる二人。

最近の朝はこういうのが多い。



オーマジオウは働く時間の方が多かった。雇ったアイルーのお給金稼ぎを初めとした資金運営。資材提供などの資材集めをしたりと忙しい。

実際はただ力があるだけの人間であるオーマジオウがそれらをこなせるのは、オーマ

ジオウの力があつたこそであり、資金運営などどうやってるか理解できずにしていく。

「なんでできるんだろう、不思議でならない」

Fate／で言うところの黄金律と言うものだろうと考えて、考えないようにしている。後はなにげに異世界の事情であろうと、困っている者は全て助けたい者が多くて、バランスを取りながら派遣したりする仕事。良いのかなと思いつつも、すでに妖精國を好き勝手にしたのだからいまさらと、気にしない事にした。

やっと仕事が付いたと思つたとき、誰かが訪ねて来る。

「オーマ」

「メリュジーヌ」

「子供作ろう?」

可愛らしく首を傾げて迫ってくるメリュジーヌに恐怖する。ここ最近、赤ん坊と云う存在を知り、母と言うものに憧れるメリュジーヌは、休み時間を見つけてはこうして迫る。迫らない時間の方が好きなので、まだ見回りがあるからと頬を撫でながら答えるオーマジオウ。

目を閉じてんとうなりながら、いちやいちやしてる二人。その後はメリュジーヌから逃げるように、色々な世界を視察したりするオーマジオウ。

おっぱいが世界を救う世界からありふれたスキルで神を倒した世界など、数多の世界で理不尽と言うものを覆す存在とコンタクトを取る。

その中で死者蘇生が一番悩む問題だと、オーマジオウは思った。

アイテムがあれば手軽にできるのだが、死者蘇生は正しいのか分からない。少なくとも、ドクターやマシユに生きていて欲しくても生き返えらせないと、行動にしない辺り、自分は酷いのかも分からない。

ただフオウをこの手で倒した為、マシユにどんな顔で会えば分からない。そう思いながら見ていると、小さくなった神が現れた。

「ケルヌンノス? どうしたんだ?」

なにげにお酒、日本酒の瓶を持っているケルヌンノス。いろんな世界の酒が飲めて驚いているケルヌンノスはお酒が好き。それで死んだらと思うながら、お酒を飲んだケルヌンノスが悩みがあるから相談したいと素振りで話す。

「なに? スピネルが最近困った事に巻きこまれてる? スピネルの事が好きだねケルヌンノス」

頷くケルヌンノス。どうも巫女にそっくりらしい。そんな話をしながら、懐からいくつか聖杯を取り出す。

「これでなにがあっても平気だよ」

ありがとうと喜ぶケルヌンノス。これでアリシアとプレシアを救って、フェイトとなのは以外の者が驚愕するのだが気にしない。

そんな事をしながらも、いまを生きるオーマジオウは自室に戻る。

「……………働くって大変だな。人理修復も酷かったけど」

そう思いながら、自分がこんな風になるなんて想像できなかつた彼は苦笑する。そんな事していると、扉が開き、鍵をかけられる。

「メリユジーヌ」

「……………またお休みだよねオーマ♪」

——待って、ここ最近多いよ。オーマジオウの力あつても耐えられるけど耐えたく、あつ、待って、待ってくださいっ。まつ……………

いただきます♪

こうして幸せな時を過すごしていくのでした……………

第1と第2特異点攻略

気が付くと夢の中なのはよくある話だ、ここ最近幸せだからそうなんだろう。自分はいま、あの日を夢見てる。人理修復の旅が始まる時、カルデアに来た時の夢を見る。

私が見殺しにした大切な後輩、私が殺したビーストIVなどと出会いながら、物語は進む。

夢の中でも彼らを見捨てないといけないのか。それは嫌だ、ああ嫌だ。

だからだろう。力を使い、問題ない事を理解して、私は黒の騎士王へと挑む。

「変身」

【祝福の時!!最高ツ!!最善ツ!!最大ツ!!最強王ツ!!逢魔時王ツ!!】

ああ夢の世界だから、私は蹂躪できる。



この本によれば、真なる力を発揮した魔王。オーマジオウは黒き騎士王を一撃で屠

り、崩れ行く地下の中で、カルデアスに落とされそうになるオルガ・マリー所長を助け出す事に成功する。

その後、カルデアに戻ったオーマジオウは今後の為に動きだし、驚き、自分に不信感を抱く者達を無視して、思うがままに行動するのであった。

「ゴーストの力で所長の魂を保護するのに成功したし、次はカルデアの安定と異世界の彼らの協力だな」

そうして行動に移る中、アイルーがカルデアの人手となつて安定する頃に、英霊召喚をするように勧められた。正直オーマジオウは乗り気では無い。

英霊程度、自分が集めた理不尽達の前では無力に等しい。せめてギルガメッシュなどの最高クラスの存在で無ければいけない。そう思いながらも召喚する事に。

「ランサー、メリュジーヌ。召喚に応じたよ、あ・な・た♪」

こうしておいしくいただける中でオーマジオウは準備に準備を重ねて、第1特異点オルレアンへと舞い降りた。



フランスの特異点でやるべきことは、ワイバーンによる襲撃をどこまで抑え込めるか

であった。

「本田ツ、トカゲ狩りだ!!」

「あいよ両津の旦那ツ」

バイクに乗り性格が変わった本田が両津を連れて爆走する。両津率いる武装集団がフランスを駆け巡り、人を助ける中でリムルの軍隊がワイバーンを蹂躪しつつ、人々を救う。

「良いのでしょうか先輩、私たちは見ているだけで」

「見ているだけは心外だよマシユ。彼らの働きに対しての対価を用意しながらだよ、こちらは。無人世界での金銀などの資金源の発掘をしつつ、弾丸などの資材提供。ワイバーンを排除するほどになると、お金が掛かってね。計算しながらフランス中に散った人達の行動の把握と、やることはあるよ」

「分かりました。マシユ・キリエライト、できる限りお手伝いします」

放たれるバーサーカーサーヴァントに対しても、転生者同盟にとって敵では無かった。

「ハレルヤツ!」

放たれるタラスクが横回転しながら迫る為に、リムルの嫁（将来）の一人シオンが叩き返す。

ついに内臓を口から吐き出して倒れる悲しき竜、マルタにビルドとクローズのライダーキックが決まる。

百合の騎士であるデオンに対して、継国緑壺が首を跳ねて倒して、そのままヴラド三世を倒す。

「もはや人では無く、鬼そのもの……彼らの為にもここで止めなくてはいけない」

アタランテやカーミラもライダー達が倒した頃、ファブニールが羽ばたくが、そんなのは銀さん達の敵では無い。

「いやいやいやいやッ」

「相手、相手の力量考えて!?ここはトリコさんとか、そっち系の人の出番だから」

「いや、案外ギャグ次元に巻き込めればいけるんじゃないか?」

「近藤（銀魂）さん、さすがにそれは無理ですぜい」

「おお沖田（銀魂）、お前この世界だと無明三段突きとか、ジェット付けてできないのか?」

「そう言うのは土方（銀魂）さんの出番でしょ」

「さつきから（銀魂）ってなに名前の後に言ってるんだテメエらッ、ともかくここは一度撤退………ん、なんだあれはッ!?!」

「鳥だ」

「えっ？ ジャンヌオルタとの決戦じゃなくて？ オルタ出番無し？」

「うっふふふ、待っていてください安珍様っ♪」

現れるバーサーカー清姫のオンステージに平成仮面ライダー達が挑み、ついにトドメのライダーキックが決まる頃に、あまり好き勝手やつても色々起きる事が分かった。けどやめない。

「夢なんだから好きにさせて欲しいよホント」

「子供作ろう」

「……………夢だよね？」

腕に抱き着くメリュジーヌに恐怖を感じながら赤ちゃんアイルーで我慢してもらい、オーマジオウの力を使い、第2特異点であるセプテムを見つけて、さっさと攻略に乗り出すのであった。



「そなたと共に手に入れれば、メリュジーヌも我が物になるのか？」

「ネロ皇帝、ひとまず落ち着いてください」

メリュジーヌが赤ん坊アイルーをあやししながら、同盟軍としてネロ軍と協力するオー

マジオウ達。その際にスパルタクスなどが怪しい動きをしそうになるが、オーマジオウが丁寧に対応すると、圧制者判定から外れる。

その後、ステンノ様は無視していいよねと思いつながら、サポートガジェット達をローマ中に放つて、敵側の動きを把握して動く。確かここにはレ／フ教授がいたはず。

大切断の準備をしつつ、両さんから話があると云われて話を聞く。

「人手が足らん」

「そうなんですか？」

「正確にはやばい奴らは儂らでどうにかなるが、一般兵とか殺す訳にはいかない現地人が敵に回ると面倒なんだよ。正直新選組（銀魂）やヅラの配下とか、そう言ったレベルの奴が欲しい」

「アイルーがいるけど、彼らは古龍の世話に私達の世話で忙しい。んー………」

そうして考えた結果、生きていれば問題ないか、因果を遡ったりして作ったホームクルス（幼女）の身体を使うオルガマリー所長に聞いてから、彼女達を送り込む事にした。



連合帝国に寝返った兵士達は戦慄した。

「に、逃げろおおお」

「化け物だああああ」

叫び声を上げる中、それは笑顔で蹂躪する。二足歩行する獣人であり、喜々として男を狩る者。

この素晴らしい世界に祝福をから呼び寄せたモンスター、女性オーク達が彼らに襲い掛かる。

「初めまして、ピチピチの15歳、オークのステファニーと申しますッ」

「助けてくれッ」

「さあ、あなたの息子はどんなのか紹介しておくれよッ。あなたの自慢の息子をねッ」

「許してッ、俺の息子はシャイなんですッ」

「ただ逃げても追いかけるわマイダーリンッ」

「ひいひいひいひいひいひい」

そんな混戦の中、オーマジオウはいいのかな、と思いつつ頬をかく。オークの人達には捕まえた連合兵士は殺さなければ好きにしていると、ネロも許可を出している。ネロもなかなか慈悲深い王様だなと納得している。・・・良いのか？

「ブーティカさん？どうしたんですか？」

「あんだ私がどうという英霊か知らないの？」

その後はブーティカさんに土下座するオーマジオウ。銀さん達がオークに恐怖する中でエルメロイ先生などを捕獲しかけられたりと色々忙しく動く。

途中でスバルタクスが敵側になったがオークをけしかけながら、ローマの王である始祖足る存在と戦い、勝利するネロ。

そして現れるレ／フ教授は召喚したアルテラに切り裂かれ、敵としてオーク軍隊を薙ぎ払うアルテラ。

『メロンディフェンダー』『『『ガードペント』『』』』

無数の盾を召喚して防いだオーマジオウがゆっくりと歩み寄る。

【お前程度の存在、仮面ライダーの世界には多くいる】

【ソロモン】

鳴り響く音に顔色を変えるアルテラ。現れたそれは破滅の本を召喚して、アルテラの宝具を消し去る。

【お前は私には勝てない、なぜか分かるか?】

【コーカサス】【ダークカブト】【ダークドライブ】

閃光のように駆け巡る戦士の攻撃に吹き飛ばされる。そこに静かに無限に近いほどの刀剣の武器を召喚して、雨のように放った。

【私は生まれながらにして、最低最悪の魔王だからだ】

絆値の高い古龍達がアイルーと共に絆技を放ち、ローマの特異点は制覇した。

これが始まりだ

それは突然だった。

『チヨリーリースト♪マジめんご♪間違えて君殺しちゃったてへぺろろーん♪』

何が何だかわからない。

『最近転生流行ってるし、それでいいよね？答えは聞いてない（キリッ）』

『家族？一緒に死んだよ？それは俺の所為じゃなくて、君が死んだ所為だからセーフっ

しよ♪』

『ともかく転生、凄いのつけちゃうよ。レッツゴー♪』

そして俺は藤丸立香になった。



妖精國まで来られたのは奇跡だ、だがこの奇跡もここまでだろう。この先の事は俺は分からなしいし知らない。何が正解で何が駄目か分からない。

「指示をお願いします藤丸っ」

助けて欲しいのは俺の方だよ。モルガンとの戦い、分身体のモルガンに押される中で防衛態勢を取る。

「防衛じゃダメですつ、反撃しないとツ！」

「信じてくれみんなツ！いまは耐えるんだツ」

サーヴァントを一時的に召喚するが、やっぱりみんな話を聞いてくれない。確かに見る限り増えるモルガン相手に、籠城戦のような事は愚策だろう。だけど突破しようとしても状況を変えられないのだから、あの瞬間まで堪えるしかないじゃないか。

もしかしてあの瞬間は来ないのかもしれない。そう思ったら全身の血が引いていく。だけどこれしか無い。自分達にモルガンの軍勢を倒す術は無いんだよ。

「前に出ますッ！」

「!? 待ってくれアルトリアッ!!」

悲痛な叫び、だけどモルガンを二体引き裂くアルトリアに、他の英霊も動く。

これで良いのか、これならまだ円卓軍も助かる可能性が出るのか？

分からない事ばかりであり、だがやはり愚策である事に変わりは無かった。

「先輩ッ!!」

上半身だけのモルガンが動いた。生氣は無いし、この分身体は死んでいる。なのにどうして動く？ 答えは他の分身体が操ったから。

槍先が俺に迫る。刺さったら痛いし、死ぬかもしれない。

力は使えない。サーヴァント誰かに助けてもらうしかないけど、誰が助けてくれるの？

アルトリアは前に出ているし、いまこそ貴方も戦う時ですと言う顔で見てる気がする。

他のサーヴァントはモルガン相手に手いっぱい、ダ・ヴィンチちゃんも無理だよ。

ああ痛いのは嫌だけど、無理だよ。もう、無理なんだよ。

鮮血が待って顔にかかる。かかる？

「……………えっ」

目の前にマシユが居て、槍が彼女に刺さっている。

……………どうして？

マシユはヒロインだから、そんな致命傷な一撃食らうはずないじゃないか。なのにどうしてそうなった？

俺だから？

「藤丸立香」が俺だからこんなダメなのか？

一部のサーヴァントからは本気で挑んでくださいと期待される。

一部のサーヴァントから責任から逃げるなど怒られる。

俺を許してくれるのはほんの少しだけ。それでも手のかかる子供として扱う。ああ
そうだ、俺は子供なんだ。みんなが思うほど大人じゃないんだよ。

「マシユ……………」

その瞬間、モルガンが一齐に槍を放ち、マシユが両断された。ああ……………

「マスターなぜ力を、戦わないのですかッ!？」

「あなたは見ているだけじゃないでしょ!!どうして見てるだけなの?!」

そうじゃないといけないんだ。元々「藤丸立香」にこんな力は無いんだよアルトリ
ア・キャスター。

やめてくれアルトリア・キャスター。そんな見損なつた顔されても困る。

ダ・ヴィンチちゃん、どうしてなんて顔で見ないでくれ。

「まず一人、後はマスターを殺せば問題ないでしょう」

「マシユ……………」

「私にはそんな男を庇う貴方の気持ちは分かりませんマシユ。戦う力があるのに戦わな
い愚か者なぞ」

モルガンまでそう言うのか、だから使えないんだ。だって、だって……………

「せん、ばい……………」

「……………マシユ」

……もう無理だ。俺に世界を救う事、世界を殺す事はできない。

「気に、しないでくだ、さい……………これは、私の」

「マシユ……………」

「あなたは、きに、しない、で……………」

動かなくなるマシユ。俺はもう、どうしていいか分からない。初めから自殺するなりなんなりすればよかった。

死ぬのは怖い、だけど、信じてくれた人を裏切るのは死ぬほど怖いんだよ。

「所詮犬死ですか、残念です、マシユ」

……………いまなんて言った？

『君みたいな息子助ける為に死ぬなんて、君の両親犬死にだね、ぷっぷー』

「いま、なんて言った？」

俺は良いよ、俺はどうしようもなくダメな人間だ。

「あなたのような人を救おうとして、犬死にと言わず、なんていうのですか？」
「ただ、マシユはなあ、母さんと父さんは俺の事を大事にしてくれたんだ。

バカにするな、バカにするなッ。」

血が流れる。涙のように流れるそれは手からも流れ出る赤色。それだけは許せない、それだけは許せないッ!!

「……………あ……………」

もうすべて壊れてしまえ。

『アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア——ッ!!』

【祝福の刻ッ!!】

背後にある建物が一瞬で蒸発して、マグマが流れ込む。

【最高ッ!!最善ッ!!最大ッ!!最強王ッ!!】

空気が震える、世界が激震する、世界が震える。

【逢魔時王ッ!!】

現れる魔王の魔力値にダ・ヴィンチは驚き、モルガンは豹変したそれに目を見開き、回りのみんなは驚愕した。

「……………もういいい」

そう言いながら、

【全部壊れてしまえッ!!】

【エボル】

黒い球体が現れ、それを頭上へと蹴り上げる。遙か上空へと打ち上げられた黒い玉は、

【ブラックホールフィニッシュッ!!】

強大な、ブリテンを覆うほどの球体へと変わり、大地へ降りて来る。

「待てマスターッ!!」

【チャーオー♪】



「がはっ……………」

モルガンは全力で玉座を守ろうとしたが失敗した。

玉座所か城すら原型を留めず、大地のほとんどは消し飛び、僅かに玉座があるだけだ。

「ああ……………」

モルガンはブリテンが滅んだ事を受け入れなかった。だが、

【アギト】

「ッ!？」

異聞帯の空を打ち破り、汎人類史の空の下、それは気妙な紋章を広げた。

【アギトの刻】

「やつ、やめ」

【ライダーキック!!】

足を一步、踏みにじるように前に出すオーマジオウ。それで異聞帯は奈落の虫ごと踏みにじられた。

奇妙な音を鳴り響き、異聞帯にいた全ての命をこの手で奪ったオーマジオウは、晴天の中で吠える。

獣のように、怒り狂ったように、自我を失ったように吠えた。



最後の異聞帯の外で、終末の本を呼び出し、世界を破壊しながら攻め込んだ。

「お、お前」

何かオルガマリー所長に似た何かがあったが、元々助ける気も何も無かったから、徹底

うるさい。

【終焉の刻】

【アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア——ツ!!!】

【逢魔時王必殺撃】

背中の針が時を刻む。最大に、最速に、最広範囲に。

オーマジオウの叫び声はストレスを発散させる子供のように大きな声で吠える。

時計の針は一秒で光年ほどの時を進ませる。オーマジオウに近ければ近いほど、速く時は進む。

それは銀河を超え、宇宙を超え、外なる世界にも届くほど。

もはやそれは、時間と言う概念の奈落の穴。

奈落の虫すら飲み込み、落下すると言う概念すら存在しない【無】の世界に落ちていく。

それは世界の壁すら超えて、転生させた神の世界も飲み込み、彼が知覚できる全ての世界にまで危険を及ぼした。

【少年よ、貴殿に世界は荷が重かった】

そう一言を放ち、英霊の座でグランド・キャスターは英霊の座を守りながら、グランド・アサシンはオーマジオウを切り裂いた。

だが

【なに?】

、広がり、勢いを増して、全てを飲み込もうとする時間の流れ。

オーマジオウは一度死を迎えた。だが過去に干渉して生きている時間と繋ぎ合わせ、死んだ時間を無かつた事にした。

死する存在、死が存在するが特定の条件でないと発動しない相手に死を与える事ができるグランド・アサシンだが、どんな状態でも死がある存在を殺す事はできなかった。

死んでも死んでいない時間にアクセスして、無かつた事にできる。それが時を司る魔王の力である。

グランド・ランサーやグランド・アーチャーも出て来るが、殺しても勢いを止める事もできず、また死んでいない時へと時間がすり替わった。

時の流れが英霊の座を崩しだす中、手だてが無いと思われた時、それは急激に止まる。

【ッ?】

【見苦しいぞ、異世界の私よ】

それを止めたのは、同じ【オーマジオウ】であった。

【ああ……あつ、アアアアアアアアアアアッ!!】

オーマジオウに挑む【オーマジオウ】。それに激突する力だけで世界に激震が響き渡

る。

こうしてオーマジオウが止まるまで争いは続き、彼は絶望の中で時を過ごす。

「素晴らしいッ!!」

それに歓喜する男がいた。

「あの神に転生させられた時、私も気が狂いかけたが、これは素晴らしい。あのお方こそ、我が魔王に相応しいッ」

そうして絶望の中にいる魔王は長い年月一人で過ごし、一人の転生者に好きに力を振るうべきと囁かれる。

これが最低最悪の魔王が、その力を振るった日であった。

第3と第4特異点攻略

第3特異点オケアノスの際、自前で用意した30の戦艦と転生者ソルダートの戦艦を投入する転生者同盟。いまオケアノスに31の戦艦が蹂躪する。

「先輩、桂さんがメガ・フュージョンの許可を要請しています」

「またワイバーン相手だから許可しないでマシユ」

ワクワクしながら使い方を学んでいたと思ったら、巨大ロボで暴れたいらしい。呆れながらこの海だけの世界で、島に居座る海賊、ドレイク船長と協力関係になるオーマジオウ。

ジェイアークと共に海を渡りながら悪い海賊達を沈めたり、オークに渡したりする。

「マジかよ、1分の1スケールのロボか。せめてメリユジー又たんくらいの美少女にやられるんのなら拙者は感無量♪」

「お前は私を怒らした」

海賊黒髭（黒髭はオークに渡す）一行を倒して、女神エウリュアレとアステリオスを拾い、海を進む。

「先輩、エリザベスさんからヘラクレスとの戦いでメガ・フュージョンの要請が」

「許可する」

さすがにヘラクレスもJの戦士には勝てず、イアソンが持つ聖杯を手に入れ、ダビデ王との会話をした後、オリオンとアルテミスの結婚式を挙げる事になる。

「メリュジーヌも着るの?」

「うん、私達もまた結婚式上げるの」

「酒だ酒だッ、無限に酒が出るっていいねえこれ」

「エウ、リュアレ、歌、つて、くれ、る?」

「もう、仕方ないわね。今日だけよ」

「この中で不幸なの俺だけか?」

「ダーリン、私幸せ♪」

ドレイク達海賊は両さん達などと酒を交わして、メリュジーヌとまた結婚式を上げるオーマジオウ。アルテミスも上げて、オリオンとの結婚をアタランテに祝ってもらう。

途中、オリオンが逃げ出してジェイアークを強奪。緊急メガ・フュージョンして挑むものの、30隻のメガ・フュージョンの前に膝を折る。オーマジオウが罰として強制的にアルテミスと未来永劫に結ばれるように因果律を結ばれる。平行世界にも安息の地は無い。

アイルーに料理を運んでもらい、こうして第3特異点は制覇される。



「ドクター達も心配していたけど、抑止力は仕事してるんだろうか」

会議の中でオーマジオウの力に触れられたが、問題ないの一言で遮った。正直、始めの時は絶対に触れて欲しくない話である。

英霊の中にはオーマジオウの力を感じ取る者も居た。何名かは力の規模が分かっているから、自分が手抜きしていると思ひ、諭すように話しかけて来るのが嫌で仕方なかった。

だけどもまだから分かるが、完璧に自分はオーマジオウの力を使っていなかった訳では無いようだ。

（よく考えれば分かるものだ。武術も何もしてこなかった私が、人理修復の旅を平然とやっているのだから、どこかで中途半端に力を使っていたのだろう）

スカハサ師匠辺りはその辺りが気に食わなかったのか、地獄の特訓をしてきた。ギルガメツシユ王などは、力を持ちながらその責任から逃げる姿勢が気に食わないと言われた。

力の責任なんて取りたくないと言う意思、未来の無い世界に生きていたくないと言う

絶望、楽したいと言う怠惰等々。自分は普通よりも怠惰な生き物であるのは理解している。

「いまはなぜ働けるのだろうか」

そんな事を思いながら、英霊召喚をする。いまでは転生者同盟に英霊枠もある。ただジャンヌなどはすまなそう顔をしていたりするのはなんでだろう？

「これは夢だ、夢の世界だ。現実だなんてあり得ない」

そう言いながら部屋に戻ると……………

「おかえり♪」

メリュジーヌに襲われた。



第4特異点ロンドンには特殊な霧に覆われて住人が苦しんでいたのでカービィに霧を飲み込んでもらってます。

それだけでなく、ブラックホールフィニッシュも使い、霧を全て消し去ると言う事態。

「ケーキですにゃ」

「おかわりはいくらでもあるニャよ」

「うんっ♪」

「楽しいわ♪楽しいわ♪」

ジャックとナーサリーライムはお菓子で捕獲して、いま面倒を見ている。霧の中で暗躍するサーヴァントは両さん達が捕獲、オークの刑に処される。

「ヒゲエなこりやつ、お前らすげーなっ」

嬉しそうにオークにドナドナされる錬金術師を見ながら、モードレッドは笑い、ジキルは戦慄している。

「もし円卓勢が敵になったら、良いよねモーさん」

「応ッ、ヨエー奴がワリイんだから気にすんなってっ!!」

許可が下りたから円卓相手にはオークの一団を雇う事を視野に入れて、アンゼルセンによって魔術師の施設に調べに行ったりしてから、地下の施設へと流れ込む。

両さんなどがモンハンの世界の武器を持って攻め込みながら、様々な方法で攻め込んだ。
だ。

たどり着いた先でテスラが召喚されるが、リムルの悪魔が瞬殺してしまう。その余波で聖杯まで破壊されそうになって、色々大変だった。

その時、魔力反応が高まる。



カルデアが驚愕する中で、その姿を表す魔術王ソロモン。だがその背後に笑顔で現れる存在がいる。

「ワタシなのだ♪」

その一撃で魔術王を吹き飛ばし、破壊の暴君^{デストロイ}ミリム・ナーヴァが笑顔でファイティングポーズを取る。

「なあなあ、これは倒してしまってもいいのだろうか？」

「ああ、そんなのはいくらでも湧いて出て来るから、気にしなくていいよ」

オーマジオウはその力で地下空間を安定させて守る。それにペロリと舌を舐めて、獲物を、オモチヤを見る目でソロモンを見るミリム。その刹那、地面から禍々しい柱が生まれ出る。

「小癩小癩小癩ッ」

薙ぎ払われる魔神柱に対して、ミリムは物量で押しつぶされた。

「ミリムさんっ」

心配するのはマシユだけであり、両さん達は地下施設の解体をしている。とばつちりは来ないと勘ぐり、色々していた。飛び出しそうになるマシユを止めるリムル。

「リムルさんミリムさんがっ」

「ああうん、まあ平気だよ。あの程度の奴にやられる奴じゃない」

そう言うのと物量で押し潰していた魔神柱が破裂して、姿を表すミリムの姿は変わっていった。

一本の角を生やして、鎧を間纏い、ストレートに流れる桜金色の髪。

「身体が痺れたのは久しぶりなのだ」

【なにッ!?】

「せっかくだ、オーマの所で作った、手加減の必殺技を試させてもらおうぞ」

瞬間、高密度の魔力球が現れ、それが回転し出し、軌跡を作り出す。それが一つの魔法陣になり、高密度の破壊力を呼び起こす。

【ドラゴ・エクスプロージョン竜星連鎖爆裂陣】

オリジナル技を放ち、それを魔術的に防いでしまうソロモン。

瞬間、光が世界を、視界を覆い隠す。



「コラッオーマッ！ 儂らの作業の邪魔するんじゃないッ」

「私に言われても困るな。私はいまの爆発で地上が吹き飛ばないようにするので精一杯なのだが」

「??？」

そこにいたマシユは訳が分からず、ソロモンの魔術的に放つ呪いや威圧に動けなかったサーヴァント達は困惑する。

（あり得ねえ……カルデアのマスターが動けるのはまだ分かるけど、彼奴ら普通の人間だろうか？なんで動けるんだ!?!）

（そもその話、私ら召喚される必要性ありますか？あの少女だけで事足りるでしょう）

玉藻の前が戦慄する中、醜く変貌しているソロモンは、苦悶に顔らしいものを歪めながら起き上がる。その姿はソロモンの姿を、肉体の器が壊れるほど、ドロドロの名状しがたい何かをあふれ出していた。

「……………なにをしたのですか？」

「えつとね。オーマが魔術的に防御壁を張っていると貫けないから、ミリムと俺が、魔術的防御壁を逆に利用して、相手の魔力を起爆剤に替える術式を作ったんだ。あれに魔法的に防御は逆効果なんだ」

「つまり、あれの総魔力量を爆発力に変えて暴発させる魔術？しかもそれをマスターが片手で防いだと？」

「そのこと」

リムルの説明に困惑するサーヴァント達。オーマジオウは傷の無い手で埃を払い、壊れかけて本性が出かかっているソロモンに告げる。

「もう帰れ、まだ遊んでやる時期じゃない。お前は間違えた、私がいる状態で事を起こしたんだ。それは失敗するのは必然であり決定だ」

名状しがたい悲鳴のような呪詛が飛ぶが、それを涼し気に流すオーマジオウ。ミリムがトドメの魔力を集めた。

「お前の時代は終わっている。故にお前は私に勝てない。私は最低最悪の魔王、様々な世界の理不尽と友人だね。君には彼らの遊び相手をしてもらうから、準備をしておくよ
うに」

そう言ってソロモンは姿を消し去り、ロンドンに平和が戻るのであった。

第5と第6特異点途中

普段のオーマジオウは忙しい。アイルー達のお給金集めや資金集めなどをしながら、異世界の要請で転生者同盟を派遣したりする。

その再配は本人やその世界の人と話し合いして決めてる。基本的にオーマジオウの趣味なので無料で行うが、異世界の、しかも関わる事が無い存在に助けを求める事はどいう意味なのか、オーマジオウすら分からない。だがするのが彼だ。

「魔法少女のマスコットが全て黒幕などと言う風評被害を出した奴らの惑星を破壊したな。サルベージした物は有効活用しよう」

魔法少女達も蘇生させたし、ハッピーエンドで良いよねと呟いた。

こうしてしばらくしていたら、コンコンと部屋をノックする者が現れる。

誰だろうと思ひ、部屋に招き入れると、難しい顔をしたジャンヌとアルトリアだ。要件は分かるが中に入れて紅茶を入れる。昔と違いこんなことができるなんてね。

話を聞けば、案の定、記憶引き継ぎによる罪悪感であった。ダ・ヴィンチちゃんもパワーアップの為に座にアクセスして知ったようだが、どうも初期の頃の記憶はあるらしい。

大抵のサーヴァントは自分は間違いを犯したと認識していて、クーフリーンの兄貴は謝って済む話では無いから、謝罪は行動で示すと言ったスタンスで行動する者。それがどうしたと訪ねるギルガメッシュ王などいる。

アルトリア達は自分が持つオーマジオウの力を理解せず、無理強いをしてしまい申し訳ない。謝って済む問題では無いが、言葉で伝えたかったと言ってくる。

「気にしないで欲しい。私も言葉足らずなところはあつたから」

オーマジオウはサーヴァントを憎んだり恨んではいけない。それを確かめ合つて、ジャンヌは今後何かあればできる範囲協力すると言つたので、お願いしたい事があると言

う。

「メリュジーヌを止めてほしいんだ」

ここ最近、サキュバスのように思えるくらいに毎夜毎夜過ごしている。それを聞いたジャンヌとアルトリアは頬を赤くするが、任せてほしいと言つてメリュジーヌの元に向く。

しばらく女子会のような事を開いたりして、メリュジーヌの余計を削つてくれたおかげでただ眠るだけに済む。時々食われるが、ホントアルトリア達には助かつた。

銀さん達はそのまま絞りつくされろと言うし、助けてくれなかつたから。

こうしてサーヴァント達と共に行動して、次に備えるのであつた。



第5特異点イ・ブルーリバル・ウナムに置いてオーマジオウの取った行動は、女性オークをケルトに押し付けながら、両さん達はエジソン軍へとぶつけると言う、まさかの第三勢力のような行動であった。

さすがに略奪は（男兵士がオークに食われる以外）していないが、エジソンへと流れるオークを見下ろしながら、彼女達に見つからずにラーマの回収を優先する。

お前なら大丈夫、余が鍛えてやろうと話しかけてきた人だ。あの人には苦手意識しかないが、嫁さんが関わるのなら別だ。

後はアーケードに変わらないように世界線の維持だろう。当時ここを通る時は分岐するんじゃないか気が狂ってた。アーケード知識は無いんだよ。

空を飛ぶ戦艦に乗りながら、オーク達が戦艦に男を連れ込んでハーレム天国をしている中、ラーマを助け出して、彼の事をナイチンゲールさんに任せる。

正直ナイチンゲールは苦手だ。あなたは病気だと言って、治すと行動に移る。心の病気で言うとってものはいそいそですと言って、無理矢理治そうとする。物理的には無理です壊れてしまいます。

今回は治りかけですが治しましょうと言って迫ってきたところ、メリユジーヌやアルトリアが半狂乱で必死に止めていた。正直、アルトリアは思いこんだら破滅に行くから、気にしないでって言うか恨んでいないんだけど。

「あなた？ いま浮気した？」

「最近アルテミスに影響されてない？」

「ママ友だから」

得意げに言うメリユジーヌに、オリオン共々何かが冷えた気がする。浮気していない時はオリオンを部屋に匿って良い気がした。

後、アトルリア顔はリリイとかえつちちゃんとかそう言う年齢の子だけだから、乳上には興味は無いから。えっ、ダメ？ 少し長い夜を過ごすようだ。



「シーター!!」

「ラーマ様!!」

出会えない呪いなんてものはすでに解いておき、ベオウルフを倒したカービィは、その後にはスカハサ師匠に目を付けられた。

エジソンはオーク達が磔にしておみこしのようになっているところを助けてあげた。他人の気がしない。

カルナは戦士としてお前達の挑戦は全て受けようと言ってしまい、いまオーク無双してる。無視しよう。

「先輩、レジスタンスの皆さんと連携を取り、エジソンさんの戦力を加えた我々の戦力は上がりました」

「じゃあ、そろそろご飯代も確保してるし、絆モンスターでライドして戦おうか」

古龍を初め、絆モンスターのエサ代は馬鹿にならない。銀さん達も働いてるし、資金が大変だ。

ともかくメイヴと戦う日は近い。

「魅了対策しないと」



宝具を解放して、死の槍を纏うクーフリーン・オルタ。その槍の一撃は必ず死ぬ呪詛の固まりだ。

だがオーマジオウの手によって因果を変換されてしまい、死の概念は無い。ただの鋭

すぎる刃だろう。当たらなければ意味が無い。

そして対峙するは人類の限界を超えた者。継国緑壺。舞い上がる火の粉は刃と刃がぶつかったから起きた自然現象。

「チイイイイイ」

オルタは舌打ちしながら、槍を巧みに操り、魔神柱を足場に駆け出す。緑壺はメタルクラスタホッパの足場をうまく使い、その手に持つプログライズホッパブレードを握りしめる。

「日の呼吸」

「カアアアアアアアアアア——ツ!!」

放たれる剣戟を受け止めるオルタだが、その一撃はゲイボルグを破壊してその刃を首に届かせた。

不満そうに、だが納得した顔で首を斬りおとされて消えるオルタ。すでにメイヴは倒した。残ったのは召喚された魔神柱達だが、

【破滅の本よ】

開かれる無数の本が開かれ、その大地ごと魔神柱が消滅していく。後で直すとは言え、エジソン達はいいのかなと言う顔で見ている。

こうして広大な大地を蹂躪して、ケルト兵士は後から作り出された者だから、オーク

達が持ち帰った。後は円卓の騎士だけだ。

「グフフ、アタシランスロット様にお会いしたいわ。疼きが止まらないの」

「あら私はガウエイン様♪昼間だと無敵って話なのだわ♪」

「トリスタン様に早く子供を見せてあげたいわ、きつと喜んでくれるの」

「雄が60匹で雌は80匹ね、綺麗なコテージで一緒に過ごすのよッ」

「アタイ等は肅清騎士っていう子たちを狙うわ♪きつと円卓に負けなくらい強い
よ」

「彼らの息子と会うの、楽しみね♪」

「……………戦いの中で銀さん攫えないかしら？」

「あら駄目よ、契約違反よ……………バレたらね」

そんな恐ろしい会話がされる中、銀さんには悪いが彼女達の案内を頼もう。そう思う
オーマジオウ。たぶん大丈夫。

こうして次に備えるのである。



召喚されたサーヴァント達が増えて来たカルデアで、ここにオーク達は呼べないなど

思いながら色々してた。

エジソン達発明家が数多の世界から技術者を募り、色々してる。主に30隻の戦艦の改造などしている。

キャスターも異世界の物を用いて色々作っていたり、いろんな事をする中で考える
オーマジオウ。

「これは夢なんだよね？」

なんか現実過ぎない？と思いながら、メリユジーヌに膝枕されている。

「気にしなくてもいいんだよ、あなたはあなたなんだから」

「その通りです我が魔王。貴方の覇道を止める人はおりませんまい」

言われながら、なんか流されてるなと思いつつ、それでいいかと思いつつ、幸せな時間を過ごす。ここ最近天井を見ると隙間から見ている清姫にも慣れてきたし、もういいかと思う。

そろそろ子供達がオカンスーヴァントのおやつを食べ終えて来る。そう思い、身体を起こすのであった。



特異点キヤメロットで悪逆の限りを尽くすオーク達。

「トリスタン様ゲットよおおおおおおお」

「キヤスターの人達に感謝ね♪見て、びくんびくん嬉しそうに動いているわ♪」

「オーマさん神父さんと呼んでくださるかしら?」

「良いですよ」

痙攣するトリスタンはハーレム部屋に連れて行かれるのを見ながら、オーマジオウはなにも思わない。トリスタンは好きでも嫌いでもない。

英霊は苦手なだけで、害悪のサーヴァント以外、敵対する意思は無いオーマジオウ。その証拠にジャンヌオルタリイとも仲が良いのだ。

戦いの中、円卓軍は全て自分達が受け持つと女性オークが言っているので、お言葉に甘える事にした転生者同盟。彼らはいま、砂漠の王であるオディマンディアスと会合する。

「貴様がオーマジオウか、かつて世界を滅ぼした者がいまさらまた世界を救うと言うのか?」

「傲慢でも、それが最低最悪の魔王である私ですから」

砂漠のファラオはそれもまた良しと高らかに笑い、敵対しないと関係を結び、レジスタンスのようなアサシン達との協力を取りに行く。

「こちらも問題なく話が進む中、オーク達にロンゴデミアドが放たれた。それで被害は」

「戦艦が一隻ダメになっただけでそれだけです。早いうちに勝負を仕掛けた方が良いでしょう」

「マシユの言う通りだね」

まあ砂漠で色々調べる事になるけど、そもそもダ・ヴィンチちゃん来て居ないし、ホームズに会う必要は無い。

こうしてカメラロットに攻め込むのだが、オーマジオウはメリユジーヌを見る。

(なにか、ホームズと会わせないようにしている?)

その理由はなんとなく理解できる。だけどそれを口にする気は無かった。早くソロモンを倒して、また平和な雑務の日々に戻りたい。オーマジオウはそう考えながら前を歩く。

この先に何があるとうと変わらない。自分は最低最悪の魔王、オーマジオウ。ただそれだけの人生なんだから。

第6と第7特異点途中

女性オークステラ（15歳）は歓喜していた。

「強いわ♪強いわ♪いいわよガウエイン様♪もつと、もつとその力を見せて♪」

「太陽の下にいる私と互角だと……………その装備は一体」

「リムルさんからいただいたテンペスト産の装備ですよ♪あなたに会うために新しくしたのよ」

「あなたたちまだやっているの？こっちの粛清騎士はもう味見が終わりましたわよ」

鎧をはぎ取られ、涙を流しながら穢されていく男性騎士。その様子にガウエインは歯を食いしばり、ガラティーンを構える。

「そうね、そろそろ銀時さん達を襲うティアラ達も行動を終えているでしょうから、そろそろガウエイン様を我が家にご案内しなくては」

「私はこのままランスロット様のとこに出向くわ♪あのお方と共にね」

そう言つて彼女は狂気的な笑みを浮かべてランスロットを見つけた。

「エレイン……………」

絶望した顔で呟く湖の騎士。エレインとはランスロットを愛する者であり、ランス

ロットの愛を勝ち取る為にあの手この手を使う存在。ランスロットは冷や汗を流す。

オーク達に指示を出して、つまみ食いは私が愛し終えた後となる。ちなみにジオウはゴーサインを出している。

「円卓だし別にいいよねアルトリア」

「少し貴方と円卓の騎士について話したいですが………ランスロットとエレイン姫ですし、まあいいでしょう」

なぜかこの後、トリスタンとガウエインがオークに捧げられるのだが、アルトリアは知らない。

こうしてオーク達の蹂躪が始まり、勢い余って銀時達まで襲われるが、オーマジオウはメリュジーヌの時に助けてくれなかったから、まあいいかの一言で見捨てられる。

モードレッドとの戦いは、オーマジオウがモードレッドを若返りの薬で若い姿にした。

「な、なんだあこれはあつ!？」

「……………このまま持って帰りたい」

「なにか言ったオーマ？」

メリュジーヌの目が危険だった為に、幼女モードレッドは紳士な転生者に連れてかれてモードレッドは紳士な転生者相手に女王様している。それでいいのかなと思いが

ら、アグラヴェインとの戦いはリムルに任せた。

獅子王との戦い、騎士の戦争、命を懸けた戦場にしては、青少年に見せられない戦場が繰り広げられる中、オーマジオウは獅子王へと出会い、武器を交えた。



獅子王の考えは良き魂、善性を持つ者を保管して人理を救う。

そんな正義を背負う彼女に対して、死者の声を聞かせる縁結びの神を使用するオーマジオウ。

『こんなの望んでいない』

『痛い、痛いよお……………』

『信じていたのに信じていたのに』

最初、顔色を変えなかった獅子王だが、だんだんと心が壊れていく中で、これが保存される人の声だとオーマジオウは圧倒的に攻撃して精神的に壊しにかかる。

騎士王が精神的ダメージを回避する為に幼女のような反応し出したり、ジャンヌが世話する中で、本当の魂と言うものを力で呼び起こして、ゴーストとなった彼らが獅子王に救済の手を伸ばす。

そんな中で聖槍を破壊した時、側で戦いを見守っていたベデイヴィエールが驚き、騎士王が泣き始めた。

救いの手段を簡単に破壊された後、後悔するまで現実と言う物を物理的に見せるオーマジオウ。獅子王もついに少女のように泣きだした。

「お前さま、本当はアルトリアの事を許してまっえんね」

紅閻魔が真剣に尋ねたが、オーマジオウは静かに……

「いや、アルトリアって一度現実見せないと反省もクソも無いから……」

悪い事をしたのだろうかと思う中、獅子王の心を碎き、聖剣を返還させた。

ついでお尻ペンペんの刑を紅閻魔が担当してこれにて一件落着と号令を出すのにかなりの時間をかけた。

この特異点、報酬として男を捧げるので解決してもゆっくり滞在した。結果、オークは満足、被害は広がるのだがオーマジオウは気にしなかった。どこかで心のネジが壊れているのだろう。

そう思ったメリユジーヌは優しく癒してあげたとのこと。オーマジオウは膝に幼女モードレッドを乗せているので、メリユジーヌは分からせるために夜を楽しむ気だ。



「各特異点攻略も着々と進み、君のおかげで半年で特異点はあと一つになったよ。やり方はさすがに言いたい事はあるけどね」

苦笑しながらドクターロマニはオーマジオウと話し合い、所長の精神安定の為にサーヴァント達がフォローしたりと、色々話し合っていた。

曰く、どこまで話すべきか。

彼らの最近の悩みはこの人理修復が終わった後の事にシフトしていた。まだ特異点の一つ残っているが、ソロモンを名乗る事すらできなかつた者に対して、彼らは圧倒した。故にそちらを考える事の方が長い。

オーマジオウは全て真実を話しても良いし、自分をサーヴァントとして召喚したと言つても良いと話している。

彼にとつてもう、時計塔の魔術師も世界も怖くない。怖いと言う感情が欠如してしまつた。

ロマニにだけは全てを話している。ダ・ヴィンチちゃんとは後々で気付いてしまつたがなにも言わない事にしたらしい。これについて彼女に何かをする権利は無いと。

オーマジオウはロマニ、ソロモンを見ながら、彼は話しかける。

「君は僕まで救う気なのかい？」

「問題ない。例えソロモンの亡骸で生まれた、ゲーティアが相手だろうと、私は負ける事は無い」

「そうだねうん、君の力は力を失った僕でも強大であると分かる。だからこそ、君はこの先、本当に全ての力を振るうのかい？」

ソロモンは生まれながらに王であつた。王として生まれ、王として死ぬシステムである。

オーマジオウもまた生まれながらに王である。世界を救う為に力を行使する王。故に力を振るう者の末路は決まっていた。

「このままだと君は」

「話したはずだドクターロマニ。私は一度全てを見捨てたと」

力を振るう事を恐れ、その後の全てを拒絶し、親が自分の所為で死んだと言う事実から逃れる為に、彼は全てを放棄した。その代価として彼は救えたはずの者、全てを見殺しにした。

「その私はもう一度やり直す事など、本来あつてはならない。私と過ごした彼らはたった一人だ。同名で同一の存在だろうと、それは違う人なんだ」

私はオルガマリー所長を見殺しにした。フランスに住む住人を見殺しにした。ローマ兵士達を見殺しにした。多くを見殺しにした人理修復の旅。

そして異聞帯では世界そのものを見殺しにして、マシユが死んだ。

全ては戦う事、この世界で生きる事、力を持った責務など、全てを考える事をやめて、この世界を受け入れずに生きた己の罪である。

「だからもう、人を殺してもなんとも思えない」

「藤丸君……………」

「もう私は藤丸立香では無いよ。私はもう、最低最悪の魔王オーマジオウ。それ以外にあり得ない」

そもそも藤丸立香ですら無かった、半端者である。

だけどもいまは、もう何も怖くない。

誰かを殺しても、誰かに恨まれてもなんとも思えないのだ。

「まあ、だからと言って責任から逃げちゃダメなんだけどね」

そう思いながら、いまを生きる事に集中する事にした。明日は明日考える。いまはいまを考える。

「それが、いまの私の答えだ」

「君は……………君のその選択の先は、きつと普通じゃないよ?」

「ああそれでもいいさ、それでも」

仲間と言ってくれる人が一人でも居ればいいさ。



第7特異点バビロニアにて、賢王と謁見してすぐに協力関係になる。

「ふん、王としての顔になったな。前のように我らの事を紙くずのように見ていない点、そして自分のする事に少なからず覚悟した点を評価してやろう時の王者」

こうしてまだ巴などのサーヴァントがいる状態で、彼らの反撃が始まった。

「オークども、報酬だ。この中で最も多くの頸を持ってきた者に、我が国の兵士と床に就くことを許してやる。精々励むが良い」

オーク達のやる気も上がり、助かったはずの銀時達が青ざめる中で、オーマジオウは気にせずに戦力を拡散する。

三女神同盟に対して、ケツアル・コアトルに対しては彼らを送り込んだ。

「アアアアアアアアアアアアアア——ッ!!」

ゼツメライズキーを無理矢理こじ開け、目の前にいる女神に高らかに宣言する転生者。

仮面ライダーバルカンの使用者に転生した男はキーを構えながら叫ぶ。

「俺は全力でお前をぶっ潰すッ。人の可能性、その未来を賭けて。俺は全力でお前を倒

すッ!!」

『ジャパニーズウルフ!!』

『カメン……ライダー……カメン……ライダー……』

『サプライズ』

変身した仮面ライダーバルカン、オルトロスバルカンは肉弾戦を挑む。人の可能性、人類の未来を見せる為に、後に続くは肉弾戦の得意な転生者たち。

「わーお♪とてもとても楽しみデース」

そう言つてケツアル・コアトルが満足して仲間になるまで、彼らは乱戦状態で挑み出す。

人の限界を超えて、転生者同盟が動きだす。



三女神同盟の一人エレシユキガルに対して、物理で会いに行つて交渉する事にした。

「どうもオーマジオウです」

「妻のメリユジーヌです」

「あわわわわわっ」

とりあえず交渉に継ぐ交渉で心を解きほぐす。ポケモンやイルー達も連れたりして、相手の心をほぐしていく。

彼女との交渉も難なく終わり、常に一定のイルーやポケモンが冥界に居て欲しいとのことだが、仕事として派遣するのなら問題ない。

こうして三女神同盟を解体しつつ、魔獣達を滅ぼす為に動くオークや転生者達。

もうすぐチエックメイトである。

第7特異点攻略

戦場は混戦していた。

多くの魔獣達を蹂躪する女性オーク達。彼女達が魔獣を倒している間、仮面ライダー達はゴルゴーンの神殿に出向き、外から両さん達は現代兵器で破壊する。

「どうだ？」

「そろそろ出て来てもいいと思うが」

戦艦ジェイアークでの攻撃もあり、ほぼ見るも無残な姿になる神殿に対して、仮面ライダー達に向かって鎖が飛んでくる。

「キングウカ」

空に浮かぶ緑髪の青年は忌々しそうに転生者同盟を睨みつける。

「忌々しい旧人類どもめ、よくも調整していた三女神同盟を壊してくれたな」

「壊れやすいものを選んでいるのが悪い」

「お前が出て来たと言う事は……ッ!？」

石化の視線を感じて全員が避ける中、地面を割り、現れる巨体。巨大な蛇が現れ、戦場を一瞬で蹂躪する。

「よくも我が神殿を破壊してくれたな」

「ゴルゴーン……」

仮面ライダー達が各々の武器を構える中、ゴルゴーンはこちらに向かって攻め込む。だが突如巨体な剣が現れ、その進路を防いだ。

「なに」

『土豪剣激土ツ!!』

「お前の相手は僕だっ!!」

「お、お前は……」

『ハイブリッド!!ハベトロット!!』

「物語の結末は、僕が決めるツ!!」

聖剣キングエクスカリバーを握りしめ、ゴルゴーンへと挑むハベトロット。それに転生者同盟は戸惑うが、両さん達は気にしなかった。

「行くぞボルボツ、俺らの相手は奴だ」

「応とも両さん」

キングウにモンハンの武器を構えて突撃する両さん達。その様子を見ながら、戦場を見ているオーマジオウがいた。



聖剣を巧みに操り、ゴルゴーンを追い詰めるハベトロット。その様子にこれで終わりかとギルガメツシュ王はため息をつく。

「ともあれだ、ゴルゴーンを討てればこの特異点は修復可能。キングウもお前達なら止められるだろう」

鎖を放つキングウだが、両さんが鎖を掴み引きちぎったりするために喉を鳴らして笑うギルガメツシュ王。半分服が引きちぎりられて、幻惑でなんとか逃げて来たマーリンはやれやれと首を振る。

「アナは戦場に行ったけど、これはもう終わりだね。私がキングウに討たれる可能性がない以上、ティアマトが目覚める要素は無い」

「果たしてそうだろうか？」

オーマジオウの言葉にふんと鼻で笑い、準備をしているギルガメツシュ王。

おそらくティアマトはゴルゴーンを討てば目覚めるだろう。その為の準備を巴達が進める中で、ゴルゴーンへとアナのハルパーが突き刺さる。

アナの手に暗黒剣月闇が握られていて、暗闇がゴルゴーンを飲み込んだ。

「やったぞッ」

「バカなツ!? ゴルゴーンだぞ!? 女神の石柱が人ごときにツ」

キングウは戸惑う中、その瞬間、ゴルゴーンは自らが開いた地面の裂け目に落ちていき、アナも消えた。

その瞬間、何かが世界を揺らす。

「なんだ!?!」

その時、不思議な事が起きた。

『海面より超巨大魔力反応あり超巨大魔力反応ありッ』

「マジかよ」

キングウも引いたいま、彼らも撤退し出して、やれやれとマーリン、ギルガメッシュ王、オーマジオウは海を睨む。

「やはりここではゴルゴーンの死、もう一人の自分の死だけで目覚めたか」

「おや? 君は全てを知らないはずだけど、知っているのかい?」

「長く見ていれば気づくさ」

「ふん、それでも夢を見るとは。酔狂な者だな貴様は」

そんな会話をしながら、彼らはティアマト戦に備えて、各々が動きだす。



楽しいな♪楽しいな♪ 遊び相手がいっぱい、楽しいな♪

【ヤメテヤメテ】

向こうから遊ぼうと言われたのは何時ぶりだろうか？ そう思いながらかつて猿王と呼ばれたそれは、ラフム達と遊んでいた。

だがその時に気づく、こいつらさつきから走り出している。

鬼ごっこだと思った、かくれんぼだと思った。

だけど違う、こいつら遊ぶ気が無い、自分とだけ。

他の人間と楽しく遊ぶ癖に、自分相手となると逃げだしているんだ。

——………はっ？

その時、彼から放たれる怒気に生物として初めて、生み出された新人類であるラフム達は恐怖を覚えた。

そして許せないと言う気持ちと共に、それは走り出した。



転生者同盟がラフムや魔獣達を虐殺している頃、ティアマトの前に立つ仮面ライダー

がいた。

その名はオーマジオウ。彼は静かにティアマトを見ながら、片手を上げる。

『ファイナルベント』『ギガント』『ブリザード』『サンダー』……………

無数の遠距離攻撃が降り注ぐ中で、仮面ライダーの召喚をせずにその力を振るう。

サイドバツシャー達やジェットスライガーからのミサイル攻撃の中で、原初の海が広がるが、それはエポルのブラックホールでリソースに変換して回収する。

絶えず降り注ぐ攻撃の中で、その巨体を表す女神ティアマト。

そこにキングジェイダー達のシルバリオンハンマーが炸裂する。

身体を半分光へと変えられたが、それでも死ぬ事の無い女神に対して、空に浮かぶ

オーマジオウは宣言する。

「死ねないのなら、死ぬまで殺せばいいだけだ」

そう宣言すると共に無数の仮面ライダー達が召喚され、必殺技を雨のように叩きこむ。

それと共に現れる破滅の本が破滅を呼び起こす。

「お前に死を与えよう」

ティアマトの神域がワンダーワールドに侵食されると共に巻き起こすエネルギーを全て吸収するオーマジオウ。

生み出されたビーストキマイラが巨大化してティアマトを食べる。

「浮気？」

その時、背後からメリユジーヌが第三再臨姿で纏わりついて、耳元で呟いた。

「えっ、なに？」

「オーマ、他の女を取り込むのどうかと思う。私がいるのに、他の女を取り込むなんて」

「待つてなに判定？ ティアマトだよ？ さすがにないよ」

「なら吸収しないで倒してよ。はい決定」

そう言つて尻尾を片腕に巻き付けながら抱き着くメリユジーヌにええ〜と思ひながら、なら冥界に叩き落ささないといけないので、それまでキングジェイダーに叩いてもらう。

これ終わつたら二人の時間ねとか、色々囁くメリユジーヌの言葉を振り切つて、冥界に落としてからは早かった。

光と闇の聖剣を取り出して、それが空間に無数現れて斬り込む。

ブラックホールのように筐体が無数に現れ、それが足止めになる中で、さつさと終わらせて勘弁してもらわないといけない。そう思つたオーマジオウは、ベルトを叩く。

【キバの刻】

深紅の月が闇夜に浮かび、魔皇剣ザンバットソードが現れてそれを握りしめる。

無数に分裂した刀身は螺旋を描き、全ての刃先をティアマトに向けた。

【ウエイクアツプ】

赤い蝙蝠のように輝き、光の十字架が降り注ぎ突き刺さる。

「私以外に差し込んで楽しい？」

【そう言うのじゃないから】

【ブレイドの時】

【これで終わりだ】

【ライトニングブラスト】

巨大なラウズカードが現れ、そこから無数の雷が剣へと降り注ぐ。

こうしてティアマトは冥界に磔にされて撃ち滅ぼされた。

【これでいいだろうメリュジーヌ】

「この後は分かってるよね？」

嬉しそうに抱き着きながら呟くメリュジーヌに、やれやれと思いつつながら頭を撫でる。
そんな時間があるか分からないが……



宴会が始まる、王から大儀であると言われながら、転生者同盟は各々好きに動く。

罪人は女性オーク元に送られ、大量の酒が転生者同盟とケルヌノスに振る舞われ、オーマジオウは一人、ジェイアークの先にいる。愛妻と共に。

愛妻の膝を枕にして静かに目を閉じ、それを愛おしく撫でるメリュジーヌ。

「もうすぐ旅は終わり、今度は異聞帯か」

「うんそうだね。けど異聞帯も問題ないよ」

「ああそうだ」

「異聞帯はどうする気なの？」

メリュジーヌの言葉に、静かに考え込む。

異聞帯は終わっている。正直、異世界化させた後、惑星をテラーフォーミングすればいいのだろうが、それでも終わった社会なのだ。

弱肉強食のロシア、人類の数が圧倒的に少ない北歐、完全にゴールを迎えた始皇帝の国。

ねじ曲がった輪廻に完璧すぎて明日が無いオリュンポス。

そして滅びるべき妖精国。

それらを身を削り、どうにかするべきことか分からない。それこそ、自分の力で終わらせればいい。

メリユジーヌの顔を愛おしく撫でるオーマジオウ。静かに星空の下の彼女を見る。

「君も流されただけとはいえ、私の妻になるなんて」

「まあ、あなたの側も悪くは無いし、一人は嫌だから」

「そうか」

最強種と渡り合える存在はいまは多いだろうに。そう思いながらもやはり手放せられなくなった。

「……………新しい現実世界も、そろそろ終わりだ」

「……………気づいてたんだね。ここがもう一つの世界つてことに」

夢は覚め、生まれたのは現実に近い何か。それどその現実は、自分が望む現実では無い。

彼の現実とは、何も力は無い上に、一人で生きる事もできない社会不適合者。

それでも幸せであり、家族に愛されてはいた。それを神によつて全てを壊された。

怒りはある、恨みがある。それと共に恐れもあるし、拒絶もある。

本来人を殴れるほど度胸があれば、引きこもりになぞなつていない。

人と関わるのが怖いんだ。人の人生を背負うのは嫌なんだ。

だけでももうどうでもいい、問題ないほどの力を手に入れた。だから……………

「人はそう簡単には変わらない。変わるのに光年を使いたいほどの時間がかかった」

「?」 光年は距離だよ」

「知ってるよ、それでもそう使いたいくらい一人だった」

もう訳が分からない世界に取り残され、一人で何がしたいか苦しんだ。

だけでももうそれは無い。気にするほど、人に優しくする感情は無い。

「まあ、みんなと相談して決めよう。異聞帯をどうするか、オリユンポスはロボット戦争
だけだね」

そう決めたところ、シユルルと腕に尻尾を巻きつけるメリユジーヌ。もう我慢できな
いらしい。

「ここは寒いな、私、寒いのは嫌いって言ったよね?」

「一緒に寝るくらいなら」

「ダメ♪あなたの熱、全て頂戴♪」

そう言って静かに自分の上に座るメリユジーヌ。

「さあパンツを下げて」

月明かりの下、やめてと叫ぶ男性と、銀時達がオークに追われて絶叫する声を聞きな
から、ギルガメツシユ王は酒を飲みほした。

最終特異点攻略

それはすぐに動いた。

七つの聖杯を手に入れたカルデアに対して、魔神柱は攻撃を仕掛ける。

だがカルデアはすでにオーマジオウ達によって改造されていて、先制攻撃に耐えるくらいはできる。耐えてしまえば彼らのターンだ。

魔神柱に対してリムルの配下、悪魔で統一された軍隊ブラックナンバース黒色軍団が動いた。

頂点にいるのは原初の悪魔と呼ばれる、始まりの悪魔の黒ノワール。ディアブロ。その下に同じ始まりの悪魔である三つの色、白ブラン、黄ジョーヌ、紫ヴィオレの三人の女性悪魔。そしてその配下達。

白ブランのテストアロッサはリムルの命令を思い出す。

『今回の作戦で出て来るのは異世界の悪魔、しかも魔術王と言う存在に仕えたつて言う大悪魔なんだ』

『クフフ、大悪魔ですか？我々と同格とはとても思えません』

彼らの感覚で言えば、魔神柱は上位魔将アークトデーモンクラスか少し上と言った感覚である。その上位種であり仮初の肉体がその上へと進化している彼らからすれば手抜きも良いところだ。

『まあ付け加えるのなら、主のいない悪魔ってところだね。ソロモンはすでに死んでい
るし、彼らは君達のような存在と言うより、術式と言った方が正しいから』

『なるほど、術者のいない術式ですから、その程度の実力しか出せない？』

ディアブロの言葉にロマニと言う人間はそうだと頷く。

そしてリムルはそれに興味を持った。

『生きた術式って言うのを、少し興味があつてね。オーマや元術者からも許可はもらつ
たから、できる限りリソースを回収しながら倒したいんだ』

——できるよね？

その言葉に悪魔達は是と答え、ひれ伏し、各々が自分でできる限り、リソースを奪い
だす。

魔神柱達からリソースを奪う。その為に彼らは強大な魔法を繰り出しながら削り、修
復させ、体制を整えさせてから崩す。

「なかなか面白い、さすがはリムル様。このような舞台を用意してくれるとは」

そそり立つ魔神の柱を掴み、へし折る悪魔はそう言いながら、各々が好きに攻撃して
いた。

核撃魔法で粉碎する黄ジョースのカレラ。魔拳の実験台にする紫ヴァイオレのウルティマ。

各々が無限に増殖する魔神柱の再生を待ちながら、好きにリムル、最愛の主の命令を

遂行するのであった。



「解体作業か、儂に任せろッ！行くぞ銀さんッ」

「応よ両さんッ！ ギャグマンガの力見せてやるよッ」

そう言つてジエイアークを使い、魔神柱をへし折りに出向く銀さん達。新八がツッコミを叫ぶのだが、実際普通に突撃すると死ぬので、スーパーロボットの力を借りる事にした。

そんな中、敵味方問わず、魔法を放つ存在がいた。

『クツハハハハハハ、我、参上ッ!!』

暴風竜ヴェルドラ。彼の災害が魔法を放ち、魔瘴を放ちながら魔神の腹の中で暴れ回る様はまさに暴風であり、厄災である。

各部署の魔神柱達が各々で対処する中、それでも火力面で言えば転生者同盟が上であった。

【なんなのだ……………】

各部署からの悲鳴を聞きながら、人理焼却式、魔神王ゲーティアは顔を歪めた。

【なんなのだ貴様は……………】

「最低最悪の魔王だよ、ゲーティア」

三日月のように釣り上げる笑みに、ゲーティアは吐き気を催す。

【気持ち悪い気味が悪い忌々しいッ！一度己の手で世界を壊して起きながら、救うだど？ 貴様は一体何を考えている!?!】

「…………？ 別に、なにも？」

その反応はまるでソロモンのようだった。それにゲーティア達は嫌悪を通り過ぎて気持ち悪さが先に来る。

「俺がお前の前に立つのは、新たらしい世界を壊す事に納得ができないからだ」

「心つてのはね、簡単に壊れるんだ。君が持つ私への嫌悪感は正しい。私はおかしい、狂っている。けど、仕方がないよね？ 初めの時、私はこうしていれば何もかも救えていたのだからね」

初めから全力を出す、または力をコントロールする。きっと犠牲は出さず、無辜の血は流れずに済んだ可能性は立証された。

ゼロでは無い。だが格段に違う。

「物語に厚みを求めるのは部外者が観客くらいさ。舞台上の人間からすればすべては救われた。それだけでいいんだよ」

誰だって楽な方が良いし、面白味が無くても良いから平和が良いに決まっている。少なくて彼はそうだ。冒険や苦難など想像上の中だけでいいんだ。よかつたんだ。

「私はもう、現実も幻覚も理解できない。それほどまでにねゲーティア、現実が嫌になつたんだ。だけどね、だからと言って壊れて欲しいとは思わないんだ」

【だからなんだと言う?!何が言いたいッ!】

「なぜ世界を救いたいのになんか全てを壊す?綺麗な物だけを愛でて、汚い物は愛せない?」

【愛する?愛すると言うか?! お前達の歴史をッ、絶望を、憎しみを、怨嗟の全てをッ】

「それら全てを含めて人だ。俺の力の大本の戦士達は、人を愛して、平和を愛して、自分のみを顧みず、全てを救おうとした自意識過剰な正義のヒーローだ」

その戦士達を召喚して、魔神柱達の解体を始める。

「お前はソロモンを見て、打破するべきと決めたようだが、ソロモンは神によって、王として機能する以外できない神の被害者だ。彼を救おうとしなかった、嫌悪し、打破すべき外道と決めたお前に、世界を救う権利は無い」

最も悪意があるのは、それを悪と認識せず、行動する事だ。

妖精國の妖精達のように、あのクソ神が俺の家族が死んだのは自分の所為では無いとほざいたときのように。

自分は悪くない、関係ないと耳を防ぐどころかなぜ自分に言うと言う心こそ、吐き気

を催す邪悪である。

「ゲーティア、人を救いたいと言ふのなら、全てを受け入れろ。でないとお前は、ただの獣だ」

【黙れッ!!】

人を知れと、我々は見ていた。人の歴史を、お前達の諸悪を、お前達の蛮行を。

全てを知った、全てを見た。だからこそ、我々はやり直さなければいけないのだッ。

「やり直す? 人が積み上げた罪はそんな事で許されるほど軽いのか?」

【もはや賽は投げられたッ!人は正さなければならぬ】

「……………やり直したところで、人の罪、神々の罪が無かったことになる?」

ふざけるなッ。

「その罪は人が背負い、償わなければいけないッ。神もまた、償え。無かった事にする事など、俺の母さんや父さんを殺しておいて、世界を壊しておいて無かった事になぞさせない。その程度では許さない。許される、はずではない」

【祝福の刻】

「俺の罪も捨てない、世界を壊した罪を問われれば、別の形で償う。どんなな物語でも、無かった事にだけはさせられない。変身」

最低最悪の魔王はそう告げてゲーティアと向き合う。すでに彼らの戦いは終わって

いる。

【これで終わりだ、ゲートティア。やり直すのではなく、新たらしい道を探す事が人が世界に對する償いであり、俺が選んだ、生き方だ】

【黙れ黙れ黙れ！】

こうして二人の王は激突した。



ゲートティアは第三宝具である誕生アスルの時スきたれり、其は全デルてを修サめるモものを撃ニてスずにいた。

すでにオーマジオウが特殊能力により、光熱エネルギーをリソースへと変換する術を知っているからこそ、これは無駄だと理解したからだ。

人類悪であるビーストIの能力としてサーヴァントによる攻撃の有無を否定、破却する力もまた、サーヴァントですら無いオーマジオウには通じない。

ただの打撃による殴打を初めとした攻撃を軸に、オーマジオウと討ち合うゲートティア。

だが、それを緑と黒の風が防ぎ、赤き龍が現れ防ぐ。

無数の黄金の蝙蝠が羽ばたき、カードから雷鳴が放たれ、炎の音色が肉体に響く。

時を超える斬撃が放たれ、高速世界に入り連続の打撃。エネルギーを封印する紋章に、解放する紋章。

【ツ!?これは………ツ!?】

オーマジオウは宝具と呼ばれる力をいくつも持っている。

究極の戦士、光輝なる進化、戦い続ける意思。

夢を守る者、運命と戦う者、鍛え抜いた鬼。

総てを司る男、時の守り手、心の音色、世界の破壊者。

涙を拭う布、欲望の王、宇宙友情、最後の希望。

宇宙の神、駆け抜ける正義、命を燃やす、無敵の遊戯。

自意識過剰なヒーロー、最低最悪の魔王。

それだけで無い。

始まりの戦士から新世界の戦士と物語の剣士まで、彼の物語は終わらない。終わるはずはない。

ずはない。

たかが数年の歴史であろうと、彼らが持つ熱量は決して始まりから終わりまでを焼き

尽くした熱に焼かれる事は無い。

そう、ゲーティアは挑んでいるのは、世界の可能性である。

【ぐっはああああああああ——ッ!?!】

いつの間にか自分を囲む20人と4人の仮面ライダー。25人のライダーが現れ、静かに……………

「イツエーイツ♪テンションアゲアゲで行くぜーッ!」

「バイスうるさいよ」

「これが静かにいられるかーッ! 一気に決めようぜっ!」

【終焉の刻】

そして彼らは飛び上がる。それはゲーティアにとつてたかが1年の歳月であった。

【アアアアアアアアアアアア——ッ!!】

その程度の年月なぞ粉々に壊せるはずであった。

【逢魔時王必殺撃】

だが、拳が彼らが放つキックにぶつかる時、全身に響き、伝わるほどの振動を受けながら、徐々に後ろへと吹き飛ばされる。

【認めない、認める物か……………たかが人が、人間が、世界に刻まれた歴史を上回るなど】
【刻まれた歴史に上も下も無い、〃比較〃できるものではないんだよ。その時を生きる、今を生きる者達の力、これが、生きる者達の力だッ!!】

拳が砕け、そのまま腹部へとキックが決まる。

なぜ惜し負けた？その答えは彼ら仮面ライダー否、今を生きる者の力が、憐憫の獣なぞに負けない証明である。

初めから決まっていたのだ。今を守る戦士の力と、人類を憐れむ獣の力。どちらが上なぞ明白であった。

故にこの結末は、決まっていたのだ。

これで最後の異聞帯攻略

魔神王ゲーティアを討ち破り、平和を取り戻した世界。正直に言えばそんな世界に転生者同盟の居場所などないのだが、いまだにいる転生者同盟。

彼らは一応、サーヴァントシステムによって呼ばれた存在とこじつけて各国に説明しながら、オーマジオウはその辺の調整をしつつ、戦闘の結果を確認。四つの特異点がない事を確認する。魔神柱達を逃がさなければ、これらの事件はそもそも始まらない。

だからこそ、次にするべきことは一つ。異聞帯への先制攻撃である。



異聞帯を即座にカルデアに内緒で搜索、一定の理不尽達の報酬をこれでもかと用意して放ち、一気に攻め落とすと言う内容。ただしブリテンはそもそも外側から破壊する事は決定していた。

理由はすでに転生者同盟が攻め込み、色々やり過ぎている。同じ事をしてメリユジー

又が二人に増えても困るし、因果的にそうなることややこしい事になる。だからオーマジオウが先制で潰す。

それを皮切りに各異聞帯へと攻め込む転生者同盟。

第一異聞帯アナスタシアは、炎熱系の者が攻め込んだ。

オーズラトラーターが太陽になり、雪を溶かして、スーパーロボット達が山である異聞帯の王の先制攻撃。カドック君達の捕獲に動く。

この異聞帯はこれだけであり、後で異世界化して別世界と統合する気である。こうしてスーパーロボットによる（特にゲッター）にて撃退する。



第二異聞帯ゲッテルデメルングでは逆に冷却系の仮面ライダー達が現れ、攻め込んだ。

シグルトを捕まえて、シグルトごとスルトを倒す。ここでは異聞帯の王を倒す必要は無い為に交渉して、住人全てを異世界に連れて行く事を条件に解体は決まる。

世界が変わる為の苦労があるが、ここはおおむね平和であった。



第三異聞帯シンに置いて、これはもう正面からの侵略行為をする。その為にライダーも人を殺しても良い奴を選び、ほぼ破壊の限りを尽くす。

途中で項羽を捕まえて、凡人類史の項羽と繋ぎ合わせ説得。ぐっちゃん先輩を味方にしてハッピーエンドにした。ついでに子供できるから、始祖の子供できるけど構わない。



第四異聞帯ユガに置いては、神殺しメインでやってくる。全知全能の書による死を刻み、異聞帯の王を撃破。住人は全て異世界に纏めて保護する。

さすが両さんでも無傷ではアルジュナオルタはきつく、擦り傷してしまった模様。



こうして第五異聞帯以外の異聞帯を撃破しながら、最大戦力をオリュンポスに投入す

る。

地下にあるオリュンポスに攻め込むマジンガーは、その背に担ぐポセイドンを降り注ぐゼウスの雷の盾にして防ぎながら地上に降りたつ。

ちなみにアルテミスは、アルテミス（オリオン）と超人オリオンのメガ・フュージョンで撃ち落としている。戦線もすでに壊滅していた。

すぐにデメテルとアフロディーテが本体で出撃するが、銀さん達がジエイアークで出撃して撃破する。

「侍なめんなよ」

ついて現れるゼウスに対して、ミリムが現れる。

見た目的にミリムが劣勢に見えたが、ジエイアークに乗る新八は叫ぶ。

「ミリムさんが雷そう受けしながら平然とそれ以上の高熱線放つって、俺らいる!？」

「見ろよあのガキ、雷受けて嬉しそうな顔して、Mなのか彼奴」

「聞かれたら殺されますよ」

『身体が痺れるのは、転生者同盟と協力してからよくあつて嬉しいぞ。さあ、お前の全力をもう少しアタシに見せて見るのだ』

モニターに映るミリムは楽しそうに蹂躪を開始する。その余波は世界を壊している為、こちら側についた協力者達を確保に出向く仮面ライダーが吹き飛ばすほどだ。

そしてついに無理矢理身体に張り付いたミリムは、ただ力の限りに殴るだけである。殴る、殴る、殴る。

めりめりと外装を取り外し、子供らしく、ちまちまでは無く派手に壊し始めている。ゼウスの雷鳴がとどろく。だがミリムと言う厄災を払う事はできず、ついにシステムが停止する。その時にはリムルがせっかくだからと、デメテル達と同じように回収する。何かの役に立ってる気だ。

その時、次元が割れて、割れ目からカオスがこちらを見つめて来る。地上のリソースを全て奪い取る気だが、その時、不思議な事が起きた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオ——ツ!!」

一人の仮面ライダーが飛び上がり、キックを放つ。彼は太陽の子、仮面ライダーブラックアールエックス
BLACKRX。

彼のキックはあらゆる障害を破壊して、カオスへと届く。

カオスは困惑する。ただのキックにそのような事はできないと、演算が、計算が狂う中、その一撃はカオスを打ち破る槍として、聖槍ロンゴデミアドとして、カオスを貫いた。

「仕事はしたぞ、オーマジオウ」

そう告げて仮面ライダーブラックアールエックス
BLACKRXはカオスを打ち破った。



「と言う訳だ、君らクリプターは本格的に活動する前に壊滅した」

「ああそのようだ」

キリシユタリア・ヴォーダイムはそう頷き、舌打ちするカイニスを大人しくさせていた。
た。

双子の英霊はすでにリムルが倒しており、タロスは神妃がこちら側の為に無力化している。

「すまないが、神アフロディーテの攻撃はどうやって回避したんだい？ あれは常人では耐えられないが」

「耐える必要は無いさ。たかが音、すでにそれが分かっている以上、概念を払いのけて物理常識の領域に落とさせて、因果律で音として処理した」

オーマジオウの力で神の声、誘惑を音として処理した。それにキリシユタリアはふむと顎をさする。

「さすがにチェックメイトか、君が二度目を体験した男なのは異星の神が言っていたし、ただの劣等人間と言っていたが、全然違うじゃないか」

「彼方の時間、人の人格を壊すのはたやすいくらい長かったさ」

「なるほど、すでに人間らしい部分は欠如したか。社会不適合者と言う話だが、一切の枷が無くなれば化ける物か」

なるほどと納得しつつ、オーマジオウを見る。

「君はこの後はどうする？」

「デイビット・ゼム・ヴォイドとの橋渡しに投降していただくか。その後は向こう側にいる異星の神を滅ぼす」

「なるほど、承りまった。すまないカイニス、ここから逆転する意味は彼に壊されていく。私の目的としては、君に神殺しをさせられないのが心残りではあるが」

「ハッ、別に構わない。神の蹂躪劇はそこそこ楽しめたからな。こいつらが神より酷いのは理解した」

こうしてデイビットも仲間にして、キャスターリンボ、千子村正、ラスプーチンを撃破して、異星の神がこちらに来る事が出来なくさせた後、侵略するように攻撃する。

こうして平和の土台を整えて、転生者同盟はやっと平穏を取り戻した。



元Aチームにレイシフトなどを任せつつ、各世界の状況を把握、制御して平和を維持する日々に戻るオーマジオウ。

「君は藤丸立香に戻る気は無いのかい？」

「ないね。それは私では無い」

ロマニにそう言われながら仕事する二人。静かにロマニは手を止めて、

「なら■■■に戻る気は」

「その人間は神に殺された、元いた世界も存在しない」

藤丸立香に戻る事も、その前に戻る事もできない彼は、最低最悪の魔王として、自分勝手な救済を続けるしかない。もはやそれしかない。

キリシユタリアはそれを是として捕らえている。過去はどうあれ、過程はどうあれ、救われるべき者は救われるべきだと考えている。もはや抑止力も彼に手を出せない領域なのなら、好きにする事が彼に権利だと思うから。

「好きにはしてるさ、最近の子供できたし」

「まあね、君もおとうさんか」

そう話し合っていると、

「ん」

次元が揺れた。

『ターイム、マジーン』

そう名乗り出て現れたそれから、グランドジオウが飛び降りた。

「……………未来からの、ジオウ?」

「そこにいた父さんッ」

それは未来の子供らしい、藤丸立香のような顔をした彼は、グランドジオウの力を持っているらしい。頭の痛い話だとオーマジオウは思った。

「ウオズを殺されてくれ、彼奴の所為で俺の許嫁が五人も六人もいるんだ」

「その中にカドツクの子供はいるか」

「ヴオーダイム、お前はなにを言っているんだ」

「それはロシア系かどうかはつきりさせたいわね」

カドツクのサーヴァントであるアナスタシアはそう言い、ペペは楽しそうに微笑む。

「やめてくれ、最近はRXさんのモードレッドが酷いんだ。頼むから、彼奴が確約する前に、許嫁の話全てを破壊させてもらおうぞッ!!」

「未来を変える事はさすがに止める。やりたければ私達を倒せ」

「転生者同盟をなにげに呼ばないでくれないかな!? ちくしょう、だから母さんに食われるがままで10人も子供作るんだボンコツ親父ッ!」

そしてオーマジオウとグランドジオウが激突して、オルガマリーが悲鳴を上げる。

カルデアはこうして平和を歩み、未来へと続くのである。

「マシユ、楽しそうね」

「ええ、いまはとても楽しいです」

そう微笑み、メリユジーヌが抱っこする赤ん坊をあやすのであった。

オマケです

オマケ話

ロンゴデミアドが放たれる。術式に置いて彼女は5本も繰り出す為に、少年は森を走り抜けていた。

少年はグランドジオウの力を使う、次世代の最低最悪の魔王。ジオウの名を継ぐ少年である。

少年が仮面ライダーの力を手に入れたのは必然だった。

それはヤンデレウマ娘によって、家族を人質に取られた男を助けたいと言う意思の下、ウオズに唆されて、彼は仮面ライダーへと変身した。ちなみに転生者では無いが、親がそうだとする事を教えてもらっている。

ジオウの力を最初は否定的であったが、彼はヴィヴィオと言う友達が犯罪者に攫われた事を機に、表舞台へと姿を現した。

『俺は成るツ！例え物語を壊す最低野郎になったとしても、ヴィヴィオを、友達を救ってやるッ！』

ちなみにヴィヴィオはこの時に彼に惚れてしまい、回りから責任取らないとスタブレ

だよ?と脅されている。

そして彼には幼なじみがいる。モルガン（妖精國）とRXの娘である、モードレッドと言う名前の少女。

セイバーモードレッドと違い、魔術師の素質を持ち、いろんな薬品を彼に飲ませていたり、彼と婚約を結んだりしている。

「逃げるなッ!」

彼女は立派なヤンデレになっていた。依存系と言つて良いだろう。

「お前はオレの婿なんだから、オレ以外の女と一緒になるなッ!」

「俺まだ18歳、独り身万歳ッ!」

そんな感じで、彼は日々を過ごす。



転生者同盟は様々に世界で様々な事をする一団であり、世界を再生させたり、人々を更生させたり、無人惑星を開拓したり、世界を破壊したりする。

彼らもまた、そこにいた。サーヴァント、かつて一般人であるオーマジオウを追い詰めて、爆発させた過去がある者達。

「えつ、もしもの話ですか？」

オーマジオウがもう過去に執着も何も無い為に、断罪される事もなく、償いの為に召喚された者も居れば、今度はうまくやろうと前向きに話すサーヴァント。無かった事にしているサーヴァントがいる。だがおおむね自分達はオーマジオウの扱いに失敗したと真摯に受け入れて行動する。

そんな彼らに爆弾が投下された。アルトリアは苦虫を噛むような顔に、ジャンヌは笑顔が固まった。

だからエミヤが真面目に答える事になる。

「まず我々に話す事は無いだろう。我々サーヴァントは抑止力の使いであるから、話す事自体危険だと判断した方が良い」

それでも話したら、どうだったんですか？ 彼女はそう訪ねる。

もしもの話、抑止力の引つかかる力を持っていると他人に話せていたら、彼はもう少しマシな人生では無かっただろうか？ まだ少し、救われていたのではないかと。

「それに対しては、当時のマスターから考えてノーだ。結果は良くならないと言うより、良くしようとしなかっただろう」

エミヤ達、一部のサーヴァントがオーマジオウに対して壁があつた理由は、彼は現実を見ないようになつていた事もある。これは一緒の人格保護の為だろう。

考えても見てほしい、いきなり世界の危機に一般人の自分がミスせずにクリアしなければ、世界は終わると言う状況で、常人がまともな精神のままではいられないのか？

結果あり得ないと言うのはサーヴァントでも分かるが、それでも理解して行動してくれないと困るのというのが本音だ。

「同情はしてたね、一目見た時からありや戦士の器じゃないって感じだったからな。話も右から左に流し聞きだったし、俺らの事を夢でも見るように見てたからな」

クーフリーン、戦士としてマスターを見ていて、ダメならダメで仕方ないと付き合っていたサーヴァントは言う。自分らも荒技でしか、それを治そうとしなかったからダメだったんだろうと語り、本人も治す気が無いと言うところから、クーフリーンはどこかで諦めていた。

「まあ、あそこまで行けたのは称賛しているんだぜこれでも。師匠からの言葉に泣いたりしてても、どうにかこうにかしてたからな。真面目な奴は歯がゆかったが、俺からすれば十分やってたつてのが本音だね。まあ傍目から見たりやダメなんだがな」

「まあ確かに、薬使ってるみたいに半ば廃人状態は困ったね。けどまあ、いきなり神に殺されて、その巻き添えに慕ってた人も殺されてスタートは気づかなかったのが痛いねえ」

ロビンフットは彼女にそう言う、真面目組のオーマジオウの扱いは、世界の危機をど

うにかしたい現れであつて、オーマジオウ本人も仕方ないと割り切っている。

一番の問題は、世界の危機とか、そう言うのを受け入れるほど、彼の心は強くなかつた。よく異聞帯である妖精園まで行けた事、これが奇跡だと言うしかない。

マシユはそれを聞いて黙り込む。一度だけ、先輩である彼に、「なぜ力を」とその時に話をしたが、はぐらかすばかりであつた。

だがアルトリアは、沈痛な顔で静かに、あなたがモルガンに無駄死にして殺された、オーマジオウを庇つて、死んだ時に壊れたと呟いた。

「先輩……………」

マシユには僅かに、一周目のオーマジオウの記憶がある。

無機質と言うより、現実を受け入れていない、どこか切羽詰まつていて、助けて欲しい、泣きだしそうなほど、気が狂うほど追い詰められた人間。

何かを理解する事から逃げていて、責任から逃げていて、人からも逃げていた彼の姿。だけ……………

人が死んだ時、吐き気と共に泣いていた。

人が傷つく事を忌避して、怖がりながらも自分を心配する姿があつた。基本的、勇気の無い人間だったのだろう。

それでも、人を傷つける事はしない、優しい人間であつたのだろう。

だから自分だけは、このちっぽけで子供のような先輩を守らなければいけないと、強く想った。

それがなんなのか、よく分かった。

「おーよしよし」

メリュジーヌの赤ん坊を背負いながらあやし、彼女はいまは子供達を守る者として、彼を慕っているのであった。



「いい加減にして欲しい、あなたはなぜモードレッドを応援しないのですか？」

「ならせめて、その手に持つ薬を置いてからにしてもらおう我妻よッ」

R Xとモルガンことトネリコが対峙する。スピネルことバーヴァン・シーは呆れながら、はやてに出勤が遅くなりそうだと連絡して、ダメと言われて給料を心配する。

ケルヌンノスはヴィヴィオ達の事もあり、お酒は夜しか飲まなくなり、いまも自分の頭の上にいる。

「さすがに怒りました、今日こそはつきりさせましょうか」

「その薬、破壊させてもらおうか」

「やめてお母さまッ、ロンゴデミアドは色々まづいです！ お父様も変身しないでッ！
そんな悲痛な叫びの中、彼女は充実した日々を送るのである。

オマケだがこの話を聞いたモードレッド（正規）は死ぬほど赤面して、その場に倒れた。

イマジナリ・オーマジオウ

なぜこんなことになったのだろうか、ベットから半身を起こして頭に手を置く。

そうそれはネモシリーズがジェイアークで航海に出たいと言ってきたので、大改造した戦艦で虚数空間へと航海に出たのが切っ掛けだ。

イベントが始まった。

ゴツホが初登場し、フォーリナーがメインの物語。
だからこそ私は全てを蹂躪した。



敵方戦艦である潜水艦にデンライナーが激突する。ゼロノスのゼロライナーのドリルが敵戦艦を駆逐する。

オーマジオウの凱旋であつた。

『タイヤフェールッ！』

無数のタイヤ、シフトカーが敵を殲滅しながら進む。

敵艦に見つかって、先手を取られてもギリギリキングスラッシュで戦艦ごと機雷を斬り、虚数空間を突き進んだ。

外なる神々に操られた葛飾北斎も捕獲して、レーダーは改造済みのを使用、ネモの船は問題なく進んでいた。

頼光ママや刑部姫を召喚する必要は無く、なぜかアビーと楊貴妃がいる中で、絶望的な状況下を無理矢理くりぬいて進む。

そしてゴツホを使い、この世界に侵略行為する外の神々を捕まえた。

「お前は触れてはいけない記憶に触れた……引きこもりなのに○万円使用して、ゴツホチャレンジして爆死した私に、この記憶を思い出させた」

意味が分からない。外なる神はそう思いながら、思い浮かぶだけの拷問が始まった。

外なる神もまた神、そう簡単に死ぬ事が無い為、オーマジオウは毒が効くようにしてから毒を、身体を生きたままバラバラにしたり、史実を変えて苦しめたり、さらに他の神々にまで手を伸ばす。

全てはゴツホが来なかったからである。悲しい記憶を思い出したオーマジオウは暴走して、ゴツホを利用した者全てに罰を与えた。

「えっへへ……」

そんな中、申し訳なさそうな顔でゴツホは口にする。

「ゴツホはそんな、優遇されるキャラじゃないんですけど……」
そう口にした。

だから、分からせた。ゴツホにも、あの時、すり抜けすら来なかった爆死の記憶が、彼女を求め、その手に抱き、全てを散らす。



気が付くと裸のままベットで寝てて、起き上がるオーマジオウ。

周りには雌堕ちした、R18的な状態で寝ているゴツホ、葛飾北斎、アビーゲイル、楊貴妃、XX、ネモ女性体がいる。

顔から血が引き、青ざめた顔で俺がしたのと問いかけるが、全員がサーヴァントで無ければやばかったほどである。オーマジオウは青から白になった。

それからゴツホは愛されると実感して転生者同盟にいる。楊貴妃も大人しく、ネモシリーズも普通に働いている。だけど忘れられないのか、時々オーマジオウを誘うような態度を取ると、ささやかれている。

ちなみにその事を知ったメリユジーヌは、普通に笑顔で、部屋に連れ込んだ。

「そして生まれたのがあなたです、二世」

「マジかよ……………」

そんな話をウオズから聞かされるグランドジオウでもある息子は、大人しいフォーリナー系のサーヴァントについて、色々聞いていた。

そんな逸話があり、無理矢理王の物にされた者達は、今日も元気である。